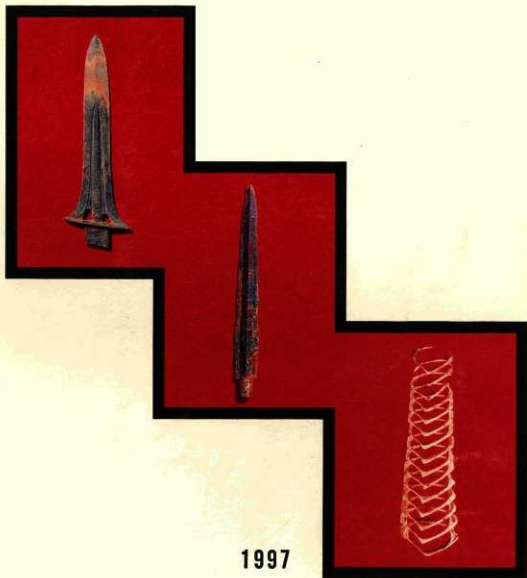


大分県 埋蔵文化財年報 5

平成 7 (1995) 年度版



1997

大分県教育委員会

表紙の写真は日田市吹上遺跡出土の銅戈・銅剣・貝輪
(日田市教育委員会提供)

序 文

大分県教育委員会では、埋蔵文化財の保護行政、発掘調査及びこれに関わる啓発・普及活動の内容を掲載した「大分県埋蔵文化財年報」を発行しております。本書は平成7年度の事業をまとめたものです。

発掘調査のほとんどは各種の開発に伴って行われ、多くの場合は「記録保存」という方法で処理されます。そのため調査終了後に工事が行われ、遺跡の大半は消失します。しかし埋蔵文化財は将来へ守り伝えるべき重要な歴史遺産と考え、開発部局に対して事業の計画段階から関与することや必要に応じて工法の変更などを要請し、遺跡を保存・保護するためのさまざまな努力をしています。また現地説明会、展示会、講演会・シンポジウム、研修などを積極的に開催し、埋蔵文化財の啓発・普及活動をはじめ、歴史資料や地域の活性化策としての活用も図っているところです。

本書では県・各市町村などが行ったものの他に、国や県・市町村教育委員会指定となった文化財や、関係文献も一覧できます。本書が埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後に、本書の刊行に際して協力をいただいた各市町村教育委員会、関係の各機関、各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成9年3月31日

大分県教育委員会
教育長 田中 恒治

例 言

1. 本書は平成7（1995）年度に大分県内で行われた発掘調査のすべての基礎データと、大分県の埋蔵文化財に関わる資料を掲載している。
2. 発掘調査は、試験調査により遺跡が確認されなかったものも掲載している。
3. IV調査概要の中の台帳番号は『大分県遺跡地図』（大分県教育委員会、1993年）所収の遺跡の一覧表の台帳番号と同一である。
4. 新発見の遺跡や周知遺跡の範囲が変更となった場合は、その範囲を図示した。今回は平成5年度～7年度の3か年分をまとめて、V新発見および範囲変更遺跡一覧に掲載した。なお新発見遺跡の台帳番号は『大分県遺跡地図』の掲載方式に従い、その台帳番号に追加したものである。
5. 本書で使用した地図は『大分県遺跡地図』の縮尺と同一の2万5千分の1である。
6. 本書の執筆はIの1を渋谷忠章、同2を西哲弘、同3を小林昭彦、IIは江田豊、IIIは松本康弘、IVは各遺跡の調査担当者が分担執筆した。Vは小柳和宏・綿貫俊一・松本康弘、VI・VIIは松本、VIIIは田中裕介が取り纏めた。IXは文末に執筆者を記した。
7. 本書の編集は牧尾義則と協議しながら小林・松本が行った。

目 次

序 文	
例 言	
I 埋蔵文化財保護行政	1
1. 現状	1
2. 九州地区埋蔵文化財発掘調査基準作成へ向けて	2
3. 第16回大分県埋蔵文化財担当者研修会	3
II 埋蔵文化財の調査に関する諸手続き	4
III 平成7年度埋蔵文化財発掘届出による動向	7
IV 各遺跡の調査概要	14
V 新発見および範囲変更遺跡一覧	173
VI 現地説明会・展示会・講演会・シンポジウム等一覧	196
VII 平成7年度の史跡指定埋蔵文化財	201
VIII 平成7年度刊行の埋蔵文化財関係文献一覧	202
IX 平成7年度の時代別動向	208
X 掲載遺跡一覧	217
索 引	221

I 埋蔵文化財保護行政

1. 現 状

昭和58年より実施してきた九州横断自動車道建設に伴う発掘調査は、大分―米良間の北ノ後遺跡、六反田遺跡をもって終了した。日田市関第1・2遺跡の調査開始より12年間を要し、試掘を含め調査した遺跡数は67ヶ所におよぶ。日本最古の豪族居館である日田市小迫辻原遺跡をはじめ、高地性集落の玖珠町白岩遺跡、縄文時代の湯布院町かわじ池遺跡、近世墓の大分市女狐遺跡など注目される遺跡も数多くあった。このうち小迫辻原遺跡は、その後の日田市教育委員会の確認調査により国指定史跡となったのは周知のとおりである。これらの調査結果は、一部がすでに本報告として刊行されているが、これからが本格的となる。

一方、7年度からは大分―宮崎―鹿児島を結ぶ東九州自動車道の建設に伴う調査を開始した。米良―津久見間22.3kmが平成12年度に供用開始の予定である。この区間の遺跡及び推定地は16遺跡で、九州横断道に比べると調査対象地はきわめて少なくなっている。今年度は大分市清水遺跡、尾崎遺跡、井ノ久保遺跡の調査をはじめた。

市町村関係は、依然として大分市に民間開発が集中し、その対応に苦慮している。そうした中で、日田市吹上遺跡の鉄塔建設に伴う発掘調査は、調査面積こそ約150㎡であったが、甕棺や木棺墓から銅戈、把頭飾付銅剣やゴホウラ、イモ貝の貝輪をした人骨も検出され、福岡平野のクニグニと密接な関係を持った王の存在を裏付けるものであった。今後の周辺確認調査が期待される。

遺跡の周知徹底と埋蔵文化財の保存の重要性について、県民の理解を深めることを目的として、あらたに「中世城館分布調査」と「豊の国歴史再発掘」事業を開始した。中世城館分布調査は、県内に300とも400とも言われている中世城館の実態を把握するもので、現地調査、史料調査をあわせて行うものである。市町村職員の協力を得ながら8ヶ年の長期を予定しているが、今後の中世城館史跡指定の基本資料になるものと期待される。「豊の国歴史再発掘」は、「豊のあけぼの展」を受けついだものである。市町村教委の事業と合体させ、地域の文化財を掘り起こし、その文化財が地域の歴史にどのようにかかわったかを正しく学ぶと同時に、地域振興の手段として有効的な活用を図ることを目的としている。今年度は、織豊期の高石垣に囲まれた玖珠町角牟礼城跡を取り上げたが、今後の整備・活用及びまちづくりの基本方針が示された。

平成5年7月より検討してきた九州地区発掘調査基準は、7年度の第一回九州地区文化担当主管課長会で試行の承認がされたが、今後の取り扱いや法的な問題が残され、この点については佐賀県文化課が事務局として検討することになった。

また、市町村の文化財保護体制については、大分市、臼杵市、竹田市、日田市でそれぞれ1名の職員増があり、久住町、直入町、荻町、野津町、武蔵町には臨時職員が配置され、これで県内58市町村の半数にあたる29市町村に埋蔵文化財専門職員が配置されたことになった。

2. 九州地区埋蔵文化財発掘調査基準作成へ向け

平成5年度から開始した「九州地区埋蔵文化財発掘調査基準(案)」の作成も平成7年度で3年目を迎えた。これまで、「発掘調査基準(案)」を作成し、平成6年度の第1回九州各県・政令都市文化財行政主管課長会議に中間発表を行ったが、承認には至らず引き続き論議を行うとともに、「発掘調査経費積算基準(案)」を含め検討することとなった。遺跡・遺構の種類毎の工程表の作成を6年度から実施していたため、平成7年度は、この作業工程表から検討に入り、最終的な「発掘調査経費積算基準(案)」を完成させるとともに、全体的な「九州地区埋蔵文化財発掘調査基準(案)」の作成を目指すこととなった。

第15回協議会(7年度第1回)は、長崎市で開催。前回検討を加えた作業工程表の再検討を行った。また、作業工程表の総括表を作成することを論議、鹿児島県がその作成を担当することとなった。さらに、重機(バックホー)の積算について佐賀県案による積算(土木の歩掛り準用)と実績に基づく福岡県案を検討。試算した結果、同様の数値が算出されたため、佐賀県案を整理し基準案とすることとなった。

第16回協議会は、宮崎市で開催。作業工程総括表の検討、修正を実施。また、賃金の基準について、面積・体積の両面から実例をもとに論議した。特に、1月あたりの実働日数や調査員1人あたりの標準的な作業員数を再度検討するとともに、重機の積算基準について論議し、修正をはかった。さらに、整理報告書作成について、作業工程による積算案を大分県が提示。それについて、修正を加えた。これで、基本的にはすべての論議が終了したことになる。

第17回協議会は、福岡市で開催。これまで検討してきた「発掘調査経費積算基準(案)」を成文化した。また、編集会議を日田市で開催し、成文化した基準の見直しを行い、主管課長会議への報告書を作成した。

主管課長会議は、佐賀県で開催された。これまで検討してきた「九州地区埋蔵文化財発掘調査基準(案)」の報告を行った。ここで出された意見として

- ① 市町村及び法人を本基準の適用対象としてどのように位置付けるか。
- ② 個人専用住宅の取り扱いに関する文言の整理及びその運用について
- ③ 本調査等の経費の原因者負担の法的根拠、及び予備調査費の文化財保護担当部局の負担の表現について

など、種々出されたが、これらについては、さらに論議が必要なことから、当面の措置として課長会議の意見を付したうえで、本基準案を試行することとなった。また、本基準の正式な施行方法についても論議したが、結論を見いだせなかった。なお、とりまとめの事務局県が大分県から佐賀県に変更された。

その後、九州各県政令都市文化財行政担当者協議会では、施行にあたって添付することとされた課長会議の意見の検討を行うとともに、法制担当部局の意見を聴取することとした。また、第2回の主管課長会議では、現在、文化庁で積算基準等に関する動きがあり、施行にあたって各県から出されている意見を検討するため協議会を開催し論議するほうがよいとの意見があり引き続き協議会を開催することになった。

第18回協議会は、佐賀県で開催。調査基準に関する文化庁の考え方、各県等で意見を集約する中で出てきたものの検討を実施。特に、発掘調査基準の中での市町村、法人の適用対象としての位置付け、原因者負担に関する文章表現、基本事項の文言、不時発見の規定等について論議した。

このように、平成7年度の完成を目指した「九州地区埋蔵文化財発掘調査基準（案）」は、試行という形ではあるが一応完成し、修正を加えながらより完璧なものとするため平成8年度も引き続き検討することになった。

3. 第16回大分県埋蔵文化財担当者研修会

県・市町村文化財担当者を対象に行政的、専門的な資質向上を目的として、平成8年1月11日（木）、1月12日（金）に、大分県共同庁舎第14会議室で研修会が開催された。

第1日目 1月11日（木）

- (1) 講演「地域における遺跡の整備と活用」
奈良国立文化財研究所保存工学研究室 室長 加藤 允彦氏
- (2) 埋蔵文化財関連事務連絡
- (3) 埋蔵文化財行政担当者の直面する問題点とその対処

第2日目 1月12日（金）

- (1) 平成7年度 県内主要遺跡報告（スライド使用）

現場見学

以上の日程であった。

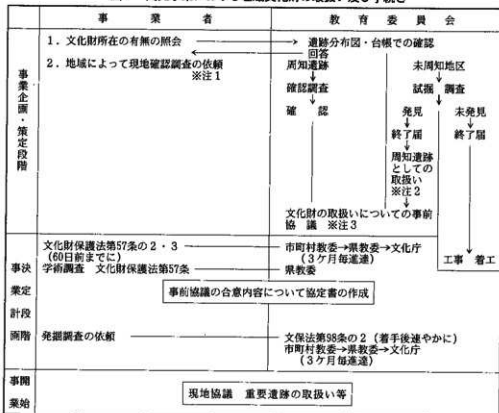
第1日目の講演では、遺跡の整備と活用について行政としての取組みの経過を戦後から現在にいたる期間を4つの画期に分けて説明があり、さらに昨今の文化財を取り巻く社会情勢の変化を指摘しつつ遺跡整備、文化財の活用のある方について述べられた。内容的には文化財が本来もっている価値を今の社会に回復し、広めるという考え方が提示されたものである。また具体的な方策の説明は、遺跡の整備や活用当面している担当者にとって、今後非常に役立つものと思われる。「埋蔵文化財行政担当者の直面する問題点とその対処」は、現在試行中の調査基準とも関わる事例が多く、活発な論議が交わされた。

第2日目は今回初めての試みとして、本年度調査された主要遺跡の報告会を行った。日田市吹上遺跡、玖珠町角牟礼城跡、中津市長者屋敷遺跡、山香町龍頭遺跡など注目されている遺跡の速報を兼ねたものであり、参加者の関心は高かった。現場見学会は大分市教育委員会が実施している府内城の発掘現場で行われた。

Ⅱ 埋蔵文化財に関わる諸法規について

まず埋蔵文化財に関わる諸手続きは、基本的には従来通りであるが、文化庁において平成8年10月25日に行われた記念物保護行政担当者会議において、埋蔵文化財に関する諸届について一部改正を含めた指導があった。今年度は年度途中に、試掘調査実施の際に98条の2の届出が必要であるという文化庁の指導により各市町村にその旨を連絡したところであったが、改めて前出の会議において試掘調査の98条の2の提出不要という指導を受けたことから若干事務処理上混乱を生じる恐れがあるため、図1のようなチャートを作成したので参照していただきたい。特に要点として、1. 試掘調査用の98条の2は提出不要になったが発掘(試掘)調査終了届は必ず提出すること。2. 57条の2・3の届出は必ず市町村教委を経由して提出すること。3. 調査が複数年度に及ぶ場合は、57条および98条関係の届出は年度毎の提出が必要である。4. 57条および98条関係の届出は県教委で取りまとめて、3カ月ごとに文化庁長官に報告する。以上の4点に留意されたい。

図1 開発事業における埋蔵文化財の取扱い及び手続き

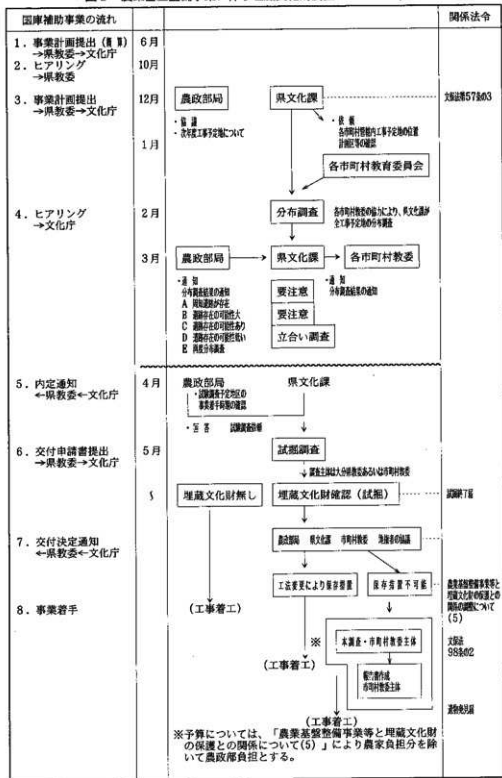


※注1 事業区域が周知遺跡の場合この段階で文保法第57条の2・3の届出を提出しても構わない。

※注2 このときの法的な取扱いは、57条の2・3とする。

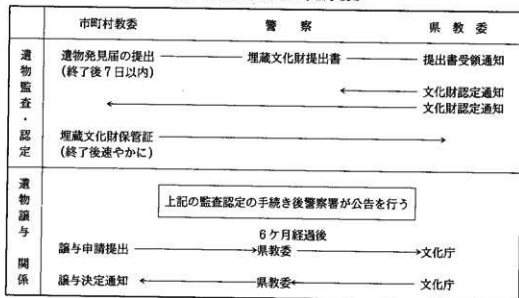
※注3 事前協議については、ア 地区除外(現状保存) イ 設計変更(未利用地・緑地)
ウ 発掘調査(記録保存)が主な内容となる。

図2 農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査のフローチャート

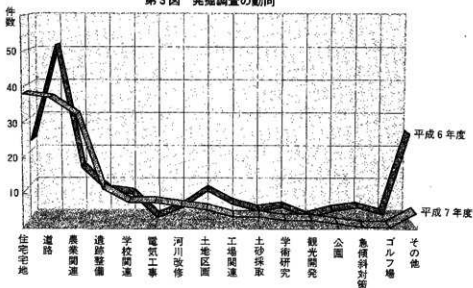


調査が終了した後の事務処理で不備が指摘された点を列挙しておくので、今後の参考としていただきたい。1. 遺物発見届は調査終了後7日以内に提出すること。2. 遺物の保管証が提出されないことが多く監査報告の際に支障をきたす場合がある。以上2点に注意していただきたい。また、発見された遺物は基本的には国の所有であることから、譲与申請を積極的に行うことが望ましい。なおその際に、譲与申請は遺物の監査認定が行われて、警察署が公告を行い6ヶ月経過しないと行えないことを付け加えておく。

図3 発掘調査終了後の事務手続き



第3図 発掘調査の動向



平成7年度 大分県埋蔵文化財発掘届・発見届一覧

遺跡名	所在地	届け出	事業内容	時代	根拠条	掲載番号
赤迫遺跡	中津市大字赤迫	中津市長	農業関連		57条の3	
上ノ原遺跡	中津市大字相原	民間	かみ/タ/建設	弥生・古墳	57条の2	1
上ノ原遺跡	中津市大字相原	三光村教育長	道路	弥生・古墳	98条の2	
大坪遺跡	中津市大字加来	民間	その他の開発		57条の2	2
沖代桑里跡	中津市大字万田	民間	宅地造成	平安・中世・近世	57条の2	6
沖代桑里跡	中津市大字永添	民間	宅地造成	奈良・平安・中世	57条の2	4
沖代地区桑里	中津市大字湯屋	個人	住宅建設	奈良・平安	57条の2	
沖代桑里跡	中津市中央町	中津市長	体育館建設	奈良	57条の3	5
御瀬池周辺遺跡	中津市大字大直	篤神社宮司	防災工事	古墳～近世	57条の2	
長者屋敷遺跡	中津市大字永添	中津市長	市営住宅建設	奈良・平安・中世	57条の3	9
〃	〃	中津市教育長	〃	〃	98条の2	
壘田小学校校庭遺跡	中津市大字島田	中津市長	学校建設	弥生・古墳	57条の3	10
中津城下町遺跡	中津市590	中津市長	観光開発	近世	57条の3	
中津城下町遺跡	中津市大字北門通り	中津市長	観光開発	近世	57条の3	
中津城下町遺跡	中津市1297・1280番地	中津市教育長	遺跡整備	近世	98条の2	
福島遺跡	中津市大字福島	中津市長	道路	縄文	57条の3	11
福島遺跡	中津市大字福島	中津市教育長	重要遺跡確認	縄文・弥生・古墳・奈良	98条の2	12
柳ヶ迫池東遺跡	中津市大字相原	中津市長	水路整備	古墳	57条の3	8
日木上ノ原遺跡	三光村大字臼木	個人	農業関連	弥生	57条の5	14
〃	〃	三光村教育長	〃	〃	98条の2	

遺跡名	所在地	届け出	事業内容	時代	根拠条	掲載番号
瑞雲寺遺跡	三光村大字成恒	三光村教育長	保育園建設	中世	98条の2	15
妙ヶ野遺跡	耶馬溪町大字宮園	中津下毛地方振興局	園場整備	弥生・中世・近世	57条の6	16
〃	〃	耶馬溪町教育長	〃	〃	98条の2	
八日市遺跡	耶馬溪町大字榎山路	中津下毛地方振興局	園場整備	縄文・弥生	57条の6	17
宇佐神宮境内遺跡	宇佐市大字南宇佐宮迫	個人	個人住宅	中世	57条の2	19
〃	〃	宇佐市教育長	〃	〃	98条の2	
大北遺跡	宇佐市大字和気	個人	その他の建物	奈良・平安	57条の2	21
〃	〃	宇佐市教育長	〃	〃	98条の2	
師幡遺跡	宇佐市大字北宇佐1888	個人	個人住宅	弥生・古墳	57条の2	20
〃	〃	宇佐市教育長	〃	〃	98条の2	
川部高森古墳群	宇佐市大字川部	歴史館長	遺跡整備	古墳	98条の2	23
瓦塚遺跡	宇佐市大字石田	宇佐市長	住宅建設	古墳・奈良	98条の2	22
虚空蔵寺跡	宇佐市大字山本	宇佐市教育長	住宅建設	奈良・平安	98条の2	24
虚空蔵寺跡	宇佐市大字山本	宇佐市教育長	住宅建設	奈良	98条の2	25
小部遺跡	宇佐市大字荒木	宇佐市教育長	住宅建設	弥生・古墳・奈良	98条の2	26
下原遺跡	宇佐市大字法鏡寺	民間	宅地造成	弥生・古墳・中世	57条の5	27
〃	〃	宇佐市教育長	〃	〃	98条の2	
台の原遺跡	宇佐市大字四日市	宇佐市教育長	宅地造成	弥生	98条の2	29
辻平遺跡	宇佐市大字南宇佐	民間	その他の建物	弥生	98条の2	30
〃	〃	民間	〃	〃	98条の2	
畑田遺跡	宇佐市大字畑田1157	個人	個人住宅	弥生	57条の2	31
〃	〃	宇佐市教育長	〃	〃	98条の2	
別府遺跡	宇佐市大字別府	宇佐市教育長	住宅建設	弥生	98条の2	
別府遺跡	宇佐市大字別府	個人	住宅建設	弥生・古墳	57条の2	32
〃	〃	宇佐市教育長	〃	〃	98条の2	
別府遺跡	宇佐市大字別府	個人	個人住宅	弥生・古墳	57条の2	33
〃	〃	宇佐市教育長	〃	〃	98条の2	
蓮華寺跡五輪塔	院内町大字小城	院内町教育長	史跡整備	中世	57条の5	34
〃	〃	院内町教育長	〃	〃	98条の2	
安心院地区条里跡	安心院町大字下毛	安心院町長	地域福祉センター	奈良・平安・中世	57条の3	
奥城古墳太平石棺群	安心院町大字下毛	安心院町長	道路	古墳	57条の3	35
上殿遺跡	豊後高田市大字佐野	西高地方振興局	園場整備	奈良・平安	57条の6	50
〃	〃	豊後高田市教育長	〃	〃	98条の2	
クギ遺跡	豊後高田市大字佐野	西高地方振興局	園場整備	中世	57条の6	
〃	〃	豊後高田市教育長	〃	〃	98条の2	
伝乗寺跡	豊後高田市大字真中	歴史館長	学術研究	近世	98条の2	45
松本遺跡	豊後高田市大字佐野	西高地方振興局	園場整備	弥生	57条の6	47
〃	〃	豊後高田市教育長	〃	〃	98条の2	
仁田遺跡	真玉町町大字日野	真玉町長	道路	縄文	57条の3	

遺跡名	所在地	届け出	事業内容	時代	根拠条	掲載番号
真玉氏居館跡周辺	真玉町大字西真玉	西高地方振興局	跡地整備	中世	57条の3	53
〃	〃	真玉町教育長	〃	〃	98条の2	
和田鼻遺跡	〃	大分県西高地方振興局	農業関連	古墳	57条の3	54
〃	〃	真玉町教育長	〃	〃	98条の2	
早田遺跡	香々地町大字香々地	歴民館長	学術調査	中世	98条の2	55
赤松遺跡	国東町大字赤松	大分県知事	跡地整備	中世	57条の6	56
安国寺遺跡	国東町大字安国寺	国東町教育長	史跡整備	弥生・古墳・中世	98条の2	61
飯塚遺跡	〃	大分県知事	跡地整備	弥生・古墳	57条の2	
川原・北江・田原遺跡	国東町大字田原	法人	宅地造成	奈良・平安・中世	57条の2	
大恩寺遺跡	国東町大字大恩寺	大分県教育長	道路	弥生・近世	98条の2	59
富来城跡	国東町大字富来浦	大分県知事	跡地整備	中世	57条の6	58
原遺跡	国東町大字原	大分県知事	跡地整備	弥生～中世	57条の3	60
〃	〃	国東町教育長	〃	〃	98条の2	
今市城跡	武蔵町大字成吉	武蔵町長	学校建設	中世	57条の3	62
杵築城下町	杵築市大字杵築	杵築市教育長	城下町整備	近世	98条の2	69
東光寺経塚群	杵築市大字横城	杵築市教育長	土砂採取	平安・中世	98条の2	70
龍頭遺跡	山香町大字野原	大分県教育長	道路	縄文	98条の2	71
薄尾・尼蔵遺跡	日出町大字南端	建設省	道路	弥生	57条の3	
扇山遺跡	別府市大字内藤字扇山	法人	大学建設	旧石器・縄文	57条の2	
藤野遺跡	大分市大字藤野字中原	民間	店舗建設	弥生	57条の2	
井ノ久保遺跡	大分市大字横尾・毛井	大分県教育長	道路	弥生	98条の2	73
藤野新土井遺跡	大分市大字藤野	大分市教育長	宅地造成	弥生～中世	98条の2	75
岩崎横穴墓群	大分市大字木ノ上	大分県教育長	河川改修	古墳	98条の2	
大分県川原1～4遺跡	大分市大字古国府	建設省	〃	縄文・弥生	57条の3	
尾崎遺跡	大分市大字松岡・横尾	大分県教育長	道路	弥生	98条の2	77
乙院屋敷遺跡	大分市大字上京方	大分県教育長	道路	中世・近世	98条の2	74
貝殻山遺跡	大分市大字一本	大分市長	道路	弥生～中世	57条の3	78
北ノ後遺跡	大分市大字上京方	大分県教育長	道路	弥生・古墳・中世	98条の2	81
久土前田遺跡	大分市大字久土	大分県知事	河川改修	弥生	57条の3	83
久原第2遺跡	大分市大字久原	大分県教育長	区画整理	近世	98条の2	84
坂ノ市桑里	大分市大字木田	大分県知事	河川改修	奈良・平安	57条の3	
坂ノ市桑里	大分市大字佐野	大分県知事	河川改修	弥生	57条の3	
下部遺跡群	大分市大字下部	民間	住宅建設	縄文～中世	57条の2	
下部遺跡群	大分市大字下部	大分市長	区画整理	縄文～近世	57条の3	87～94
〃	〃	大分市教育長	〃	〃	98条の2	
城原D遺跡	大分市大字里字台	民間	〃	弥生	57条の2	95
〃	〃	大分市教育長	〃	〃	98条の2	
清水遺跡	大分市大字横尾・毛井	大分県教育長	道路	弥生	98条の2	97
滝尾守岡横穴墓群	大分市大字津守字後迫	民間	宅地造成	古墳	57条の2	98

遺跡名	所在地	届け出	事業内容	時代	根拠条	掲載番号
滝尾守岡横穴墓群	大分市大字津守字後道	大分市教育長	宅地造成	古墳	98条の2	
多武見東中尾有田原遺跡	大分市大字横尾	大分市長	区画整理	弥生・奈良・中世	57条の3	105~107
〃	〃	大分市教育長	〃	〃	98条の2	
玉沢地区桑里跡	大分市大字市	民間	カラスケ建設	奈良・平安・中世	57条の2	
玉沢桑里	大分市大字口戸	大分県知事	道路	古代	57条の3	
玉沢地区桑里跡	大分市大字上宗方	建設省	道路	古代	57条の3	
辻古墳	大分市大字里字辻	大分市長	土地区画整理	古墳	57条の3	
〃	〃	大分市教育長	〃	〃	98条の2	
土井ノ内毛見所遺跡	大分市大字佐野	大分県知事	道路	古墳・中世	57条の6	85
〃	〃	大分県教育長	〃	〃	98条の2	
利光遺跡	大分市大字上戸次	大分県教育長	道路	旧石器・縄文・中世	98条の2	99
丹生川阪の市条里跡	大分市大字佐野	民間	宅地造成	奈良・平安	57条の2	
般若寺遺跡	大分市大字中戸次	民間	無線施設建設	弥生	57条の2	
府内城城下町遺跡	大分市都町	大分市教育長	公園造成	近世	98条の2	104
府内城山里丸跡	大分市荷揚町	大分市教育長	府内城整備	近世	98条の2	103
府内城跡	大分市荷揚町	大分市教育長	遺跡整備	近世	98条の2	
古国府遺跡群	大分市大字古国府	民間	店舗建設	弥生・中世	57条の2	
古国府遺跡群第18号	大分市大字羽屋	個人	共同住宅建設	弥生・古墳・奈良	57条の2	102
古国府遺跡群	大分市大字羽屋	大分県教育長	道路	平安・中世	98条の2	
松岡・清水遺跡	大分市松岡	大分県知事	河川改修	弥生	57条の3	
横塚第2遺跡	大分市大字里字王ノ瀬	大分県教育長	区画整理	縄文	98条の2	109
六反田遺跡	大分市大字上宗方	大分県教育長	道路	縄文・弥生・古墳	98条の2	108
下原遺跡群	野津原町大字下原	建設省	道路	縄文	57条の6	111
山下の池	湯布院町大字川西	民間	ヘドロ採取	縄文	57条の2	
大野遺跡	臼杵市大字大野字馬場	臼杵市長	市道拡幅	弥生・中世	57条の3	116
〃	〃	臼杵市教育長	〃	〃	98条の2	
孫懐遺跡	臼杵市大字孫懐	民間	工場建設	縄文・弥生・中世	57条の2	
京川遺跡	臼杵市大字前田字大日	臼杵市長	市道建設	中世	57条の3	117
戸室台遺跡	臼杵市大字戸室	民間	無線施設建設	弥生・中世	57条の2	
野村台遺跡	臼杵市大字野田	民間	住宅建設	弥生・古墳・中世	57条の2	120
野村台遺跡	臼杵市大字野田字原	個人	宅地造成	奈良・平安・中世	57条の2	
持田遺跡	臼杵市大字野田	民間	その他の建物	弥生	57条の2	
佐伯城下町遺跡	佐伯市大手町1丁目	個人	住宅建設	近世	57条の2	123
佐伯城下町遺跡	佐伯市中村南町	佐伯市教育長	駐車場建設	近世	57条の6	
堂ノ間遺跡	本荘村大字堂ノ間	本荘村長	劇場整備	縄文・弥生・中世	57条の3	125
〃	〃	本荘村教育長	〃	〃	98条の2	
堂ノ間遺跡	本荘村大字因尾	佐伯土木事務所長	道路	縄文・弥生	57条の3	124
波津久遺跡	野津町大字縄田ほか	大分県教育長	道路	旧石器・弥生	98条の2	132
尾原・西遺跡群・川原遺跡	野津町大字吉田	大分県知事	県道改良工事	旧石器	57条の3	

遺跡名	所在地	届け出	事業内容	時代	根拠条	掲載番号
桜馬場遺跡群	三重町大字市場	民間	無線施設建設	旧石器	57条の2	136
重政遺跡	三重町大字内田	三重町長	学校建設	旧石器	57条の3	137
立野古墳	三重町大字上田原	大分県教育長	重要古墳確認	古墳	98条の2	139
茶屋久保遺跡	三重町大字赤嶺	民間	無線基地施設	旧石器	57条の2	138
明照院跡	三重町大字赤嶺	民間	宅地造成	中世	57条の2	140
牟礼越遺跡	三重町大字百枝	個人	土砂採取	旧石器・縄文	57条の2	141
宇田遺跡	清川村大字三玉	大分県知事	道路	旧石器	57条の3	
柿木谷遺跡	清川村大字雨堤	大分県知事	農道整備	縄文	57条の3	143
〃	〃	清川村長	〃	〃	98条の2	
下津尾遺跡	大御町大字下津尾	大御町教育長	道路	近世	98条の2	129
大迫遺跡	千歳村大字長峰	千歳村長	道路	弥生	57条の3	134
下野遺跡	朝地町大字下野	大分県知事	農業関連	弥生	57条の3	146
〃	〃	朝地町教育長	〃	〃	98条の2	
釘小野遺跡	直入町大字上田北	大分県知事	農業関連	弥生・古墳	57条の6	
〃	〃	直入町教育長	〃	〃	98条の2	
高畑遺跡	直入町大字長湯	大分県知事	道路	弥生・古墳	57条の3	
〃	〃	直入町教育長	〃	〃	98条の2	
宮処野地区	久住町大字宮処野	大分県知事	農業基盤整備	弥生・古墳・奈良	57条の6	
市第Ⅱ遺跡	久住町大字弘原	久住町教育長	農業関連	弥生・古墳・奈良	98条の2	148
市第Ⅳ遺跡	久住町大字弘原	久住町教育長	農業関連	弥生・古墳・奈良	98条の2	
市第Ⅲ遺跡	久住町大字弘原	大分県知事	農業基盤整備	弥生・古墳・奈良	57条の6	
〃	〃	久住町教育長	〃	〃	98条の2	
弘原第1遺跡	久住町大字弘原	大分県知事	農業基盤整備	中世・近世	57条の6	
〃	〃	久住町教育長	〃	〃	98条の2	152
尾首遺跡	久住町大字弘原	大分県知事	農業基盤整備	中世・近世	57条の6	
〃	〃	久住町教育長	〃	〃	98条の2	150
弘原第2遺跡	久住町大字弘原	大分県知事	農業基盤整備	近世	57条の6	
〃	〃	久住町教育長	〃	〃	98条の2	153
小原田遺跡	久住町大字弘原	大分県知事	農業基盤整備	平安・中世・近世	57条の6	
〃	〃	久住町教育長	〃	〃	98条の2	151
板切第Ⅰ遺跡	久住町大字有氏	大分県知事	農業基盤整備	平安・中世・近世	57条の6	
〃	〃	久住町教育長	〃	〃	98条の2	149
板切第Ⅳ遺跡	久住町大字有氏	大分県知事	農業基盤整備	平安・中世・近世	57条の6	
〃	〃	久住町教育長	〃	〃	98条の2	149
板切第Ⅲ遺跡	久住町大字有氏	大分県知事	農業基盤整備	平安・中世・近世	57条の6	
〃	〃	久住町教育長	〃	〃	98条の2	149
板切第Ⅱ遺跡	久住町大字有氏	大分県知事	農業基盤整備	平安・中世・近世	57条の6	
〃	〃	久住町教育長	〃	〃	98条の2	149
弘原第3遺跡	久住町大字弘原	大分県知事	農業基盤整備	平安・中世・近世	57条の6	

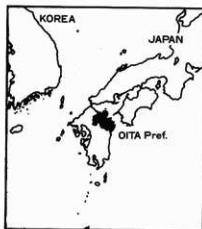
遺跡名	所在地	届け出	事業内容	時代	根拠条	掲載番号
仏原第3遺跡	久住町大字仏原	久住町教育長	農業基盤整備	平安・中世・近世	98条の2	
宇野屋敷跡	竹田市大字竹田	竹田市長	住宅建設	近世	57条の3	
岡藩銭座跡	竹田市大字竹田	個人	住宅建設	近世	57条の2	
喜多村家屋敷跡	竹田市大字竹田字渡内	竹田市教育長	道路	近世	98条の2	155
皿山社製糸工場跡	竹田市大字竹田	法人	その他の建物	近世・明治	57条の2	156
〃	〃	竹田市教育長	〃	〃	98条の2	
史跡岡城跡	竹田市大字竹田	〃	遺跡整備	近世	98条の2	157
野殿屋敷群	竹田市大字竹田	竹田市長	道路	近世	57条の3	161
〃	〃	竹田市教育長	〃	〃	98条の2	
狭田武家屋敷跡	竹田市大字狭田	竹田市長	集会所建設	中世・近世	57条の3	
〃	〃	竹田市教育長	〃	〃	98条の2	
粒瀬遺跡	荻町大字桑木	大分県知事	道路	縄文	57条の6	
寺ノ前遺跡	荻町大字新藤	荻町長	農業関連	縄文	57条の3	162
山の神谷遺跡群	荻町大字矢所	荻町教育長	道路	縄文・弥生	98条の2	165
釣遺跡	九重町大字町田	大分県知事	道路改良工事	縄文	57条の6	166
〃	〃	九重町教育長	〃	〃	98条の2	
郡原遺跡	玖珠町大字引治	個人	個人住宅	縄文	57条の2	
〃	〃	大分県知事	〃	〃	57条の3	
旦ノ原遺跡	玖珠町大字岩屋	民間	無編施設建設	弥生	57条の2	
赤迫遺跡G地点	日田市大字北豆田	個人	風刺木処理	古墳	57条の5	
〃	〃	日田市教育長	〃	〃	98条の2	
小迫朝日ヶ丘遺跡	日田市大字小迫原	大分県知事	住宅建設	旧石器・縄文・中世	57条の6	172
〃	〃	大分県教育長	〃	〃	98条の2	
史跡威宜園跡	日田市大字北豆田	日田市教育長	史跡整備	近世	98条の2	175
徳瀬遺跡C地点	日田市大字友田	日田市長	道路	弥生・古墳	57条の3	178
〃	〃	日田市教育長	〃	〃	98条の2	
吹上遺跡	日田市大字小迫	日田市教育長	鉄塔建設	旧石器～古墳	98条の2	180
三和教田遺跡	日田市清水町	大分県教育長	果道工事	縄文・古墳	98条の2	181
会所宮遺跡	日田市田島町483	日田市教育長	道路	弥生・古墳・中世	98条の2	182

Ⅳ 各遺跡の調査概要

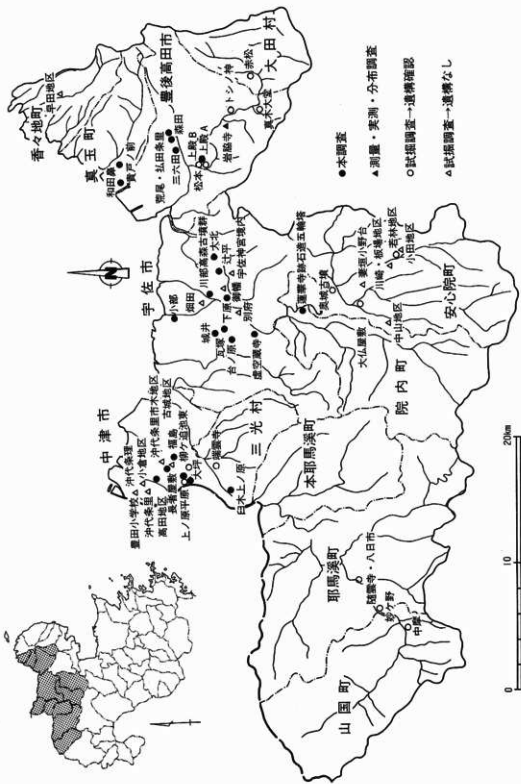
大分県域を、教育事務所管内にしたがって6地域に分け記載していく。

原則として本調査または重要遺跡については1頁、試掘調査等は半頁を割り当て、地図は国土地理院の2万5千分の1地形図を用いた。地図の真上が真北を指す。

各遺跡の概要の執筆者を、文末に記した。



中津・宇佐地域



うえのはるひらばる

1. 上ノ原平原遺跡

所在地	中津市大字相原2803他	調査面積	1927㎡
調査原因	ガソリンスタンド建設	担当者	富田 修司
調査期間	960311	遺跡処置	次年度本調査
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	103001

概要 中津市南部の北大バイパス沿いの低台地上である。古墳時代横穴墓として有名な上ノ原遺跡に近接する。5本のトレンチを開けたところ、調査区西半分は地山まで削平されていた。東側部分からは土器片が出土したため、調査を中断し、次年度に本調査を行うこととした。
(富田)



上ノ原平原遺跡位置図
(地形図「中津」使用)

おおつぼ

2. 大坪遺跡

所在地	中津市大字加来1551他	調査面積	4067㎡
調査原因	事務所建設	担当者	富田 修司
調査期間	960129	遺跡処置	次年度本調査
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	101072

概要 中津市南部、三光村との境にほど近い犬丸川沿いにある。周辺は水田で、調査区はそのなかでも一段高くなっており、畑地として利用されていた。調査はトレンチを3本設定して行った。表土より20cmほどで地山に到達した。ピットが検出され、一列に並ぶものもあるため、調査を中断し、次年度に本調査を行うこととした。
(富田)



大坪遺跡位置図
(地形図「土佐井」使用)

3. 沖代地区条里跡

所在地	中津市大字中殿	調査面積	120㎡
調査原因	道路建設	担当者	五十川孝正
調査期間	951201～951222	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	101007

位置 福岡県と大分県の県境を流れる山国川の下流に位置する中津地方の地形は沖積平野の沖代平野と洪積台地の下毛原台地に大別される。沖代条里跡はこの沖代平野の北端にあり、中津城下の南東に位置する。



沖代条里跡遺跡位置図
(地形図「中津」使用)

遺構 18世紀後半の溝一条と幕末から明治初期のゴミ穴2基が検出された。溝は水路と思われるが、その用途について不明である。全長約15mで、さらに調査区外の東西方向に伸びていると思われる。幅は1m前後、検出面からの深さは約20～30cmを計り断面は逆台形を呈している。また、溝内の南壁に沿うように打ち込まれた木杭が合計21本検出された。ゴミ穴は溝の一部に重複する状況で検出された。大部分が調査区外のため全容を明確にすることはできないが長楕円形を呈すると思われる。また、調査区の下層からは水田面が検出されており、沖代条里の北端部と考えられる。

遺物 近世陶磁器を主体とする。溝の下層部から出土した碗には見込に昆虫状文様や源氏香文を配したものや大明成化年製の銘をもつものが見られた。ゴミ穴からは数点の広東碗と明治初期の雑器類が大量に出土した。

まとめ 本遺跡付近は城下の外にあたり、江戸時代は中殿村と呼ばれた所である。時期の異なる遺構が重複していることはこの地域の開発の一端を知る上で大変興味深いと言えよう。(五十川)

4. 沖代地区条里跡（市木地区）

所在地	中津市大字永添214他	調査面積	6925㎡
調査原因	宅地造成	担当者	高崎 章子
調査期間	950601～950901	遺跡処置	盛土保存
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	101007

位置 中津市の西半分を占める沖代平野では古代より条里制がしかれていた。沖代条里は県内でも最大規模であるが、近年の開発で日に日にその姿を消しつつある。坪内の地割りは長方形が多い。市木地区は条里の南端の勅使街道沿いに位置する。現地は休耕田で、強湿地であった。

遺構 溝9条
土坑
古墳時代の耕作土

遺物 6世紀後半の須恵器
瓦片、瓦質土器片 いずれも少量

まとめ 検出した溝は水田の水路で暗黒色泥土は古墳時代の耕作土であろう。水路沿いの土坑から、須恵器の坏身、坏蓋がまとまった状態で出土した。水田にともなう祭祀に使用されたものと考えられる。今回、条里地割りの痕跡を確認するにはいたらなかった。（高崎）



沖代地区条里跡（市木地区）位置図
（地形図「土佐井」使用）



市木地区全景

5. 沖代地区条里跡（小倉地区）

所在地	中津市813-1（中央町）	調査面積	945㎡
調査原因	体育館建設	担当者	高崎 章子
調査期間	950601～960331	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	101007

概要 同地区は沖代条里内の中ほどやや西よりに位置し、早くから開発が進んでいる場所である。戦前から火葬場として利用され、その後児童相談所に建て替えられていた。字図によれば調査区北半分は水田、南半分は畑地になっており、南側からは柱穴が検出されたが、後世の攪乱が著しく、これ以上の発掘の必要はないと判断した。（高崎）



沖代地区条里跡（小倉地区）位置図
（地形図「中津」使用）

6. 沖代地区条里跡（高田地区）

所在地	中津市大字万田624他	調査面積	3605㎡
調査原因	宅地造成	担当者	高崎 章子
調査期間	950420～950720	遺跡処置	盛土保存
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	101007

概要 同地区は沖代条里の西端に位置する。周辺を宅地にかこまれ、わずかに残った水田地帯で、正方形の条里地割りを今に残している。今回の宅地開発は一つの坪に収まる範囲であるためトレンチを細長く設定し小畦畔の確認に努めたが、土層観察では不明であった。工事は盛土を行うため、床土の下の旧耕作土は破壊されないことから調査を中断した。（高崎）



沖代地区条里跡（高田地区）位置図
（地形図「土佐井」使用）

7. ^{こじょう}古城地区

所在地	中津市大字大貞字古城	調査面積	200㎡
調査原因	公務員宿舎建設	担当者	田中裕介
調査期間	960723	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	

概要 国家公務員宿舎建て替え工事のため、試掘調査を実施した。この場所は奈良時代の官道に由来する勅使街道沿いに位置し、丘陵上の地点であったため、遺跡の有無を確認する必要があった。重機により予定地全体の表土はぎをおこなったが、遺構・遺物ともまったく検出されず、基盤層がすぐに露出した。戦時中この場所は軍用工場があり、その際に削平造成されたと推定される。(田中)



古城地区遺跡位置図
(地形図「中津」使用)

8. ^{やなぎがさこいけひがし}柳ヶ追池東遺跡

所在地	中津市大字相原2865他	調査面積	620㎡
調査原因	水路改修	担当者	花崎 徹
調査期間	950417~950616	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	101066

概要 遺跡は標高36m余りの洪積台地上に位置する。周辺には、弊旗塚古墳、相原山首遺跡などが分布する。

遺構 古墳時代 堅穴住居一基、溝一条
時期不明 溝三条(出土遺物なし)

遺物 住居跡 古墳時代土師器壺、須恵器片
溝 須恵器片、環、甕、高坏

まとめ 今回の調査で古墳時代の遺構が検出された。同地区周辺には円墳、横穴墓などが分布しており、山国川流域には同時期に大規模な集落が営まれていたと思われる。(花崎)



柳ヶ追池東遺跡位置図
(地形図「土佐井」使用)

9. 長者屋敷遺跡

所在地	中津市大字永添2303-4他	調査面積	8000㎡
調査原因	市営住宅建て替え	担当者	高崎 章子・花崎 徹
調査期間	950829～960331	遺跡処置	保存について検討中
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	新発見

位置 中津市南部、北に勅使街道をのぞむ標高約30mの低台地上に位置する。西に相原院寺、東に宇佐神宮の祖宮である薦神社が位置する。街道をはさんで北西には広大な沖代条里の地割りが広がる。古くは下毛郡野仲郷に属した。戦前まで堀があいており、八並城跡として周知されていた。

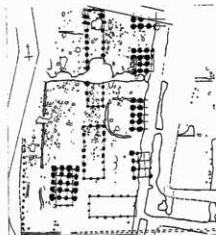


長者屋敷遺跡位置図
(地形図「土佐丹」使用)

遺構 16世紀堀2本 地下式土坑2基
8、9世紀掘立て柱建物10棟 欄列3条
布漏り状溝数条 不定形土坑多数 ビット多数

遺物 炭化米、8、9世紀の須恵器、土師器、円面硯2点、瓦

まとめ 建物は西半分に集中し、東側には空間地帯がある。側柱建物5棟と総柱建物5棟は南北に軸をとり整然と並ぶ。柱穴は一辺が1mをこえる巨大なもので、側柱建物の最大面積は100㎡、総柱建物では65㎡に及ぶ。不定形の連続土坑からは土器片とともに大量の炭化米が出土している。建物群は下毛郡の正倉であると推定され、火事により最低一回の建て替えが認められた。西は欄列に限られているが、北限、南限、東限は不明で今後の確認調査を要するものである。(高崎・花崎)



長者屋敷遺跡遺構配置図

とよだしょうがっこうこうてい
10. 豊田小学校校庭遺跡

所在地	中津市大字島田 2	調査面積	1820㎡
調査原因	校舎建て替え	担当者	高崎 章子・花崎 徹
調査期間	950727～960731	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	101005

概要 同小学校は以前校舎新築の基礎工事中土器が出土し注目を集めた場所である。小学校の北側にある幼稚園では地下1mで黒色土に到達し、石器の出土を見た。今回木造校舎の建て替えに伴い、事前調査を行うこととなった。合計4本のトレンチをあげたが、黄白色のシルト質砂層のみで黒色土は検出できず遺構、遺物の確認はできなかった。(高崎・花崎)



豊田小学校校庭遺跡位置図
(地形図「中津」使用)

よくしま
11. 福島遺跡 (三ノ丸地区)

所在地	中津市大字福島1268	調査面積	1000㎡
調査原因	道路拡張	担当者	花崎 徹
調査期間	950829～950830	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	101050

概要 遺跡は福島台地の北端に位置する。市道三ノ丸線の拡張に伴い試掘調査を行った。現行道路沿いにトレンチ数本をいれたが、遺構は検出できなかった。台地の落ち際に位置すると思われる。縄文～中世に至る土器片を十数点検出した。(花崎)



福島遺跡 (三ノ丸地区) 位置図
(地形図「土佐井」使用)

12. 福島遺跡（東入垣地区）^{ふくしま}

所在地	中津市大字福島1330	調査面積	1000㎡
調査原因	確認調査	担当者	高崎 章子・花崎 徹
調査期間	950619～950930	遺跡処置	保存
調査主体	中津市教育委員会	台帳番号	101050

位置 当遺跡は中津市南部の犬丸川沿い、標高27mほどの低台地上にある。ここは以前より福島遺跡として周知されてきた。今回の調査区は台地の東端の畑で、3本のトレンチを設定して行った。遺跡は保存が前提であるため掘り上げないことを前提に進めた。

遺構 弥生時代の土坑1、溝1
古墳時代の住居跡1
奈良～平安時代の土坑2
その他ピット多数

遺物 弥生時代中期土器、石器、土師器、須恵器

まとめ 台地の西端では以前より縄文時代の遺構・遺物が報告されてきたが、今回の調査では弥生中期以降のものしか確認できなかった。調査区東端で検出した弥生の溝には大量の土器が廃棄されており、中期の良好な一括遺物を得ることができた。この台地の北側で以前確認された弥生の群集墓とあわせて、弥生の集落の展開を考える貴重な資料となった。

(高崎・花崎)



福島遺跡（東入垣地区）



溝内遺物出土状態

うえのはるひらばる
13. 上ノ原平原遺跡

所在地	中津市大字相原字平原2803	調査面積	2000㎡
調査原因	道路建設	担当者	植田 由美
調査期間	951018～960329	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	三光村教育委員会	台帳番号	103001

位置 遺跡は山国川右岸の下毛原丘陵上に位置し、周辺には、上ノ原横穴墓群をはじめとして多くの遺跡が所在している。平成4年には佐久久保畑遺跡の調査が行われ、古代の集落形態を知る上で貴重な遺構が多く発掘された。



上ノ原遺跡
(地形図「土佐井」使用)

遺構	溝状遺構	5条
	住居跡	1基
	土坑	50基
	袋状土坑	1基
	ピット	30ヶ

遺物 土壌から下城式土器、石器等が出土。溝状遺構から9世紀から10世紀の磁器片が1点出土。

まとめ 今回の調査で、平成5年度に上ノ原遺跡で検出された溝状遺構の続きが確認された。当初溝状遺構は弥生の環溝の一部と考えられていたが、今回の調査の結果、9世紀から10世紀代の溝と確認された。

(植田)



溝水遺構

14. 臼木上ノ原遺跡

所在地	下毛郡三光村大字臼木1297-1	調査面積	500㎡
調査原因	農業関連	担当者	植田 由美
調査期間	950426～950607	遺跡処置	調査後埋戻し
調査主体	三光村教育委員会	台帳番号	新発見

位置 遺跡は、標高約60mの高台に位置している。
 周辺の下毛原丘陵上には臼木古墳をはじめとして多くの遺跡が所在している。

遺構	石棺墓	1基
	落とし穴状遺構	1基
	石蓋土坑墓	7基
	貯蔵穴	2基



臼木上ノ原遺跡
 (地形図「土佐井」使用)

遺物 石棺墓から鉄器が数点出土しただけである
 土器はわずかに数点出土。

まとめ 今回、臼木の台地で土坑墓が調査されたことで、弥生時代後期の集落がこの台地にも所在していたことが分かった。
 (植田)



臼木上ノ原遺跡(石蓋土坑墓 検出状況)

ずいろうじ
15. 瑞雲寺遺跡

所在地	下毛郡三光村大字成恒字瑞雲寺437	調査面積	100㎡
調査原因	公園造成	担当者	植田 由美
調査期間	960109～960329	遺跡処置	次年度継続調査
調査主体	三光村教育委員会	台帳番号	103024

位置 遺跡は三光村のほぼ中央部に位置する。周辺には昨年の調査で、多量のミニチュア土器が出土した成恒遺跡がある。

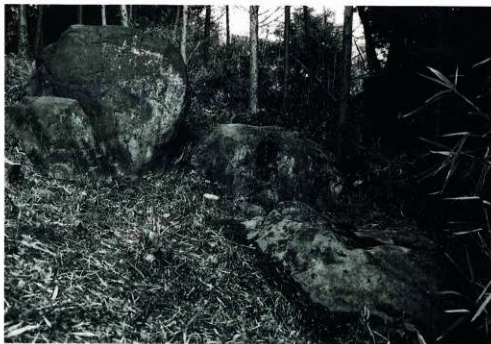
遺構 いわくら状遺構

遺物 須恵器甕（6世紀後半）
内黒土師器（9世紀）
白磁片（12世紀）

まとめ 今年度はいわくら状遺構を検出し、若干掘り下げたところで調査を終了した。来年度引き続き調査を行う予定である。（植田）



瑞雲寺遺跡位置図
(地形図「土佐弁」使用)



瑞雲寺遺跡（調査前全景）

16. 妙ヶ野^{みょうがの}遺跡

所在地	下毛郡耶馬溪町大字宮園字妙ヶ野	調査面積	4000㎡
調査原因	県営団地整備事業	担当者	村上 久和
調査期間	950615～950928	遺跡処置	記録保存
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	新発見

位置 山国川上流域の東岸河岸段丘上にある。対岸の急峻な山頂には織豊系城郭に類似した一ッ戸城がある。また、江戸時代には日田-中津間を結ぶ日田往還があり、江戸後期に一ッ戸街道ができるまでは「渡し」があった地点である。1994年に試掘調査を行い盛土工法を検討したが困難であったため1995年6月より、本調査を行った。その結果、弥生時代前期の土坑1基、同後期後半の竪穴住居跡1基、中世～近世の掘立柱建物20棟、中世末の火葬墓2基、近世の「渡し場」跡などが検出された。

出土遺物の中で特徴的なものは胎留の高取焼皿、壺類や多数の土錘がある。（村上）



妙ヶ野遺跡位置図
(地形図「裏耶馬溪」使用)



調査区全景（上空より）

17. 随雲寺・八日市遺跡

所在地	下毛郡耶馬溪町大島	調査面積	50000㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	村上 久和
調査期間	951009～951013	遺跡処置	盛土保存
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	新発見

概要 調査対象地区は山国川を挟む東西の海岸段丘上である。調査前はどこも周知遺跡にはなっていなかった。試掘調査はバック・ホーによって随雲寺地区では幅3m、長さはそれぞれの水田の広さに応じて10mから50m前後のトレンチを15ヶ所設定した。段丘下部は表土下10cmの所で礫層になるが、中部から上部段丘は表土下60cmまで3層の水田層が確認され、最下面の水田面床土から玉緑白磁口縁部片が出土した。このことから鎌倉時代以降にこの地域の水田開発が行われたことが確認された。八日市地区では5m×5mのグリッドを25ヶ所、幅3m、長さ10mのトレンチを5ヶ所それぞれ設定した。段丘下部は随雲寺地区同様表土下は礫層で、段丘上部で遺構が確認された。そのグリッドを拡張して遺構の性格を部分的に調査した。その結果、縄文時代晩期の土坑、弥生時代中期の竪穴住居跡、中世末の掘立柱建物群などを検出した。



随雲寺・八日市跡位置図
(地形図「耶馬溪西部」使用)

弥生時代中期の竪穴住居跡、中世末の掘立柱建物群などを検出した。(村上)

18. 中摩遺跡

所在地	下毛郡山国町大字中摩字白地	調査面積	400㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	高橋 信武
調査期間	950926～950928	遺跡処置	盛土保存
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	新発見

概要 平成7年度県営圃場整備事業山国地区の実施に伴い試掘調査を行った。調査対象地区は山国町の東端に位置し、山国川の右岸に広がる河岸段丘上の水田地帯である。重機と人力により25ヶ所のトレンチ調査を行った結果、近世・中世・古墳時代・縄文時代の遺物を確認した。川寄りの水田では縄文晩期の溝状遺構を確認し、設計変更で保存することとなった。(高橋)



中摩遺跡位置図
(地形図「久住」使用)

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』4 大分県教育委員会 1996年

うさじんぐうけいだい
19. 宇佐神宮境内遺跡

所在地	宇佐市大字南宇佐字宮迫	調査面積	217㎡
調査原因	住宅建築	担当者	佐藤良二郎
調査期間	950926～950928	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107202

概要 宇佐神宮南側に位置する宮迫地区には、かつて真乗坊を中心とする11の院坊が存在していた。現在は、三条の往還を中心に石垣などの遺構が良好に残っており、史跡宇佐神宮境内として国の史跡指定を受けている。調査を実施した畑地は、下桐井坊跡や実相院の南に隣接しているが、石垣などの遺構はない。試掘調査の結果では、近世以降の開墾で、水田とされていたことが明らかになったが、中世などの遺構や遺物は出土しなかった。(佐藤)



宇佐神宮境内遺跡位置図
(地形図「豊後高田」使用)

おぼた
20. 御幡遺跡

所在地	宇佐市大字北宇佐字西の宮	調査面積	200㎡
調査原因	住宅建築	担当者	江藤 和幸
調査期間	951029	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107138

概要 遺跡は駅館川東岸の台地上に立地し、御幡地区を包括して広く分布する。既往の調査で遺跡の北側部分に弥生時代の集落や6世紀の古墳を確認している。今回は遺跡の南側部分で個人住宅の建設が計画されたため調査を実施したが、後世の削平が著しく、時期不明の浅い柱穴を散見する程度であった。(江藤)



御幡遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

21. 大北遺跡

所在地	宇佐市大字和気字大北	調査面積	7,350㎡
調査原因	老人保健施設建設	担当者	川谷 浩
調査期間	950801～950830	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	新発見

位置 市内東部を流れる寄藻川は、宇佐台地の東南の隅部に沿って西から北へと蛇行している。当遺跡は東側に広がる低地を望む位置にあるが、近世の新田開発がなされる以前はこの部分まで海が湾入していた。一方、南側の川沿いの谷に面した場所には柚ノ木遺跡があり、8世紀前半頃の須恵器の窯跡をはじめとして、弥生時代後期から鎌倉時代の集落跡などが発見されている。



大北遺跡位置図
(地形図「豊後高田」使用)

遺構 柱穴群が主体で、大小10余基の不定形土坑も検出されている。これらの周囲を幅約2mの溝が方形に巡っており、その規模は東西20m、南北30m以上（南側不明）である。しかし、削平を受け遺構はいずれも浅くしか残っていない。1間×3間（1.8×3.6m）の掘立柱建物が1棟復元できる。

遺物 出土量は少ない。縄文時代の石器、弥生・古墳時代の土器片も僅かにあるが、主体は中世の土器・陶磁器である。しかし、それらもほとんどが細片のため遺構の正確な時期は決め難い。瓦器碗及び青磁碗等に13世紀頃のもの、土師器の坏や鍋等に14～15世紀頃のものがある。特筆すべき遺物としては、不定形土坑から出土した銅銭があげられる。15枚が重なっているが種類は不明である。

まとめ 宇佐台地の東南隅に溝で区画された小規模な屋敷跡を検出した。主な時期は14世紀頃と推定される。
(川谷)



調査区全景（東より）

かわらづか
22. 瓦塚遺跡

所在地	宇佐市大字石田字瓦塚54・55番地	調査面積	500㎡
調査原因	住宅建築	担当者	林 一也
調査期間	950627～951024	遺跡処置	調査後戻戻し
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107126

位置 宇佐平野中央部の四日市市街地の東側に位置している。遺跡南側には古代官道と想定される市道四日市・榑田線がある。遺跡周辺からは法隆寺式軒平瓦などが出土しており、四日市廃寺跡として知られていた。平成5年度調査で大宰府系軒先瓦や跨帯金具などが、昨年度調査で法隆寺系軒平瓦や瓦塔などが出土したため、郡衙内部に宗教的施設が併設されていた可能性が想定されるようになった。本年度調査区は昨年度調査区の北側の畑地を対象とした。



瓦塚遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

遺構 古墳時代後期の掘立柱建物1棟、8世紀後半頃の一辺約12㎡四方の区画溝やその後に掘り直された大区画溝の一部、及びそれに平行に延びる溝などが検出された。

遺物 古墳時代後期の掘立柱建物より、6世紀末頃の須恵器の坏身や坏蓋が出土している。大区画溝などから、8世紀後半頃の土師器と共に大宰府系や法隆寺系の軒平瓦、川原寺系軒丸瓦、金銅製跨帯金具などが出土した。

まとめ 今回の調査で確認された8世紀後半頃の方形区画の溝は、その平面プランや出土遺物により役所内部に建てられた持仏堂などの周囲に掘られたものである可能性が一層高くなった。しかし、新たに掘られた大区画溝の規模などについては、これからの調査で明らかにしていく必要がある。(林)



調査区全景(上空より)

文献：宇佐市教育委員会「瓦塚遺跡3次調査」『宇佐地区遺跡群発掘調査概報Ⅶ』1996年

23. 川部・高森古墳群（池の端地区）

所在地	宇佐市大字川部字池の端	調査面積	2,000㎡
調査原因	重要遺跡確認調査	担当者	真野 和夫・嶋田由希子
調査期間	950515～960328	遺跡処置	調査後埋戻し
調査主体	宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	台帳番号	107070

位置 駅館川右岸の河岸段丘上、宇佐風土記の丘の敷地南部に位置し湿地に臨む。標高29m。

遺構 横穴式石室古墳 1基

古墳は内径9mほどの周濠を巡らした複室構造の石室古墳。入り口から両サイドに3～4段の低い石積の4mほどの前庭部がつく。石室の規模は、羨門までの全長5m、玄室は奥行き2.3m、幅2mである。床面は敷き石される。前庭部から周濠にかけて大量の破碎された須恵器が出土した。また、閉塞部から石室内部では輸入陶磁器や大量の中世土器および和鏡・短刀などが出土した。

遺物 本来古墳に伴う遺物としては、蓋坏・甗・高坏をはじめ平瓶・提瓶・壺・甕・大甕など器種が豊富で量も多い。鉄製品では鉄や尾錠金具が発見された。再利用時の遺物としては、和鏡・短刀のほか、大小の土師器皿・土師器壺・黒色土器壺・瓦器壺・片口鉢・土製鍋などがある。輸入陶磁器は白磁碗・青磁の碗や皿がある。前庭部から宋銭（元豊通寶・1078年初鑄）1枚が出土した。

まとめ 古墳の年代は、大小2タイプの須恵器の蓋坏からほぼ6世紀末～7世紀前半で、再利用の時期は11世紀～13世紀。非常に長期間にわたって利用し、または供養をしたことが窺える。

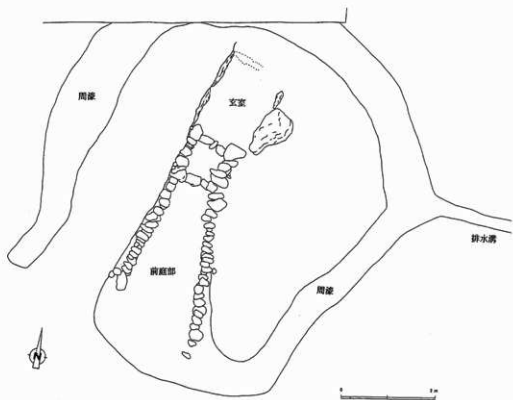
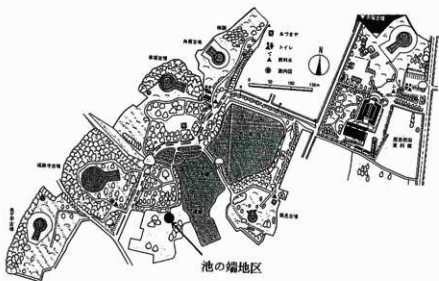
（真野）



川部・高森古墳群（池の端地区）位置図
（地形図「宇佐」使用）



洲浜桜花鏡鳥鏡（径11.2cm）



24. 虚空蔵寺跡（北区）

所在地	宇佐市大字山本字古虚空蔵	調査面積	840㎡
調査原因	住宅建築	担当者	林 一也・川谷 浩
調査期間	951206～960329	遺跡処置	盛土保存
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107135に隣接

位置 虚空蔵寺跡は、これまでの発掘調査により伽藍配置や主要な建物の規模などについて一定の成果が得られている。さらに、講堂北側約250mに位置する道路の建設にともなう調査では、8世紀末の獨立柱建物群や9世紀初めの大型の井戸などが検出され寺との関係が問題となった。その間の水田部には僧房などが存在していたことが推定されている。調査区は獨立柱建物群の南側に隣接する水田で、建物群の範囲確認を目的に実施した。調査の結果、建物跡が1棟検出されたもののその範囲は水田全域にはおよんでいなかった。



虚空蔵寺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

遺構 8世紀末の獨立柱建物1棟と道路の建設に伴う調査時に検出された近世の溝の延長部分が検出された。水田南側のトレンチでは近世の不定形土坑が1基検出されたのみである。

遺物 獨立柱建物の柱穴内部より8世紀後半代の須恵器の坏片が、溝より瓦や青磁の合子片とともに中近世の土師器や瓦質土器などが出土している。

まとめ 寺院の主要伽藍についてはこれまでの調査で一定の成果が得られている。さらに、道路建設に伴う調査では獨立柱建物群などが検出されており、寺域範囲についての問題点を提示している。しかしながら、講堂北側の水田部分の調査は不十分であり、これからの調査で明らかにしていく必要がある。(林・川谷)



調査区全景（南東より）

文献：宇佐市教育委員会「虚空蔵寺跡10次調査」『宇佐地区遺跡群発掘調査概報Ⅷ』1996年

25. 虚空蔵寺跡 (中門)

所在地	宇佐市大字山本字経塚	調査面積	10㎡
調査原因	住宅建築	担当者	林 一也
調査期間	960123～960329	遺跡処置	盛土保存
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107135

位置 虚空蔵寺跡は、宇佐市の中央部を北流する駅館川上流の西岸に位置する。寺跡は法隆寺式の伽藍配置を持ち、埴仏を出土する白鳳寺院として知られている。これまでの発掘調査により、伽藍配置や主要な建物の規模などについて一定の成果が得られている。昨年度調査により中門の東西幅が復元されるようになったものの、その奥行きなどについては不明であった。

本年度調査は中門北側の基壇確認を目的にトレンチを設定した。



虚空蔵寺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

遺構 中門北側の基壇端部及び礎石が2個検出された。基壇端部には、昨年度確認された南側のものと同様に地覆石や瓦列などによる基礎化粧は確認されなかった。2個の礎石には片側に地覆部分の付いた円形の柱座が造り出されていた。

遺物 中近世の整地層より法隆寺系軒平瓦や川原寺系軒丸瓦、埴仏、一枚作りの平瓦などが出土している。また、6号礎石の掘り方内部より縄目横叩き文様の平瓦が出土している。

まとめ 今回の調査により中門は2間×4間の規模が復元されるようになった。しかし、次のような問題点も生じた。①礎石には掘り方があり内部に縄目横叩きの瓦が含まれていた。②礎石はこれまでのものと形態が異なり地覆座が造られていた。③その地覆座の方向は異なっていた。④中央部の礎石が確認されていない。以上のことにより、中門は金堂などの礎石を再利用して建替えられたことが想定される。
(林)



中門北側基壇・礎石検出状態

文献：宇佐市教育委員会「虚空蔵寺跡10次調査」『宇佐地区遺跡群発掘調査概報Ⅷ』1996年

26. 小部遺跡

所在地	宇佐市大字荒木字小部	調査面積	45㎡
調査原因	住宅建築	担当者	江藤 和幸
調査期間	951120～960118	遺跡処置	盛土保存
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107018

位置 駅館川の下流に広がる低地の西側、標高8mの台地上に位置する。既往調査により古墳時代前期の環溝集落であることが明らかになっており、ほかにも古代の掘立柱建物や中世の瓦器焼成坑などを確認している。

遺構 古墳時代前期(布留式古段階)の竪穴式住居跡1軒。8～9世紀の掘立柱建物1棟。

時期不明の溝2条、及び柱穴多数。このほかに平成2年度に確認した布留式古段階の住居跡を切る布掘溝の続きを確認する。

遺物 確認された住居跡から土師器の甕と高杯の小片が出土する。

まとめ 今年度の調査は環溝内で発見されている布掘溝の探索が目的であった。

しかし、小規模な調査のため溝の一部を検出したにすぎず、溝の時期や全体プランを明確にできなかった。

今後も継続的な調査を行い、これらの課題を明らかにしなければならない。(江藤)



小部遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)



調査区全景(西より)

27. 下原遺跡

所在地	宇佐市大字法鏡寺	調査面積	3,000㎡
調査原因	住宅団地造成	担当者	佐藤良二郎
調査期間	951227～960322	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	新発見

位置 駅館川の東岸台地上に立地している。北側は弥生中期の集落跡である高居遺跡と接しており、さらに北は弥生中期を中心とする環溝などが発見された東上田遺跡や川部遺跡と連なる。また、これらの弥生集落の周辺には野口遺跡（約300基）や樋尻遺跡（約80基）などの弥生中期の集団墓が分布している。

一方、南側は弥生中期の集団墓が発見された御幡遺跡と接している。



下原遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

- 遺構**
- I期 弥生時代中期～後期の集落跡や墓地。住居跡4軒、小児用墳墓群6基（雙棺1）幅約3mの溝（環溝か）、大型柱穴の独立柱建物跡3棟以上（櫓か倉庫）
 - II期 古墳時代後期～末期（7C）の集落跡。竪穴住居跡1軒や独立柱建物跡5棟など
 - III期 12世紀頃の土坑墓など

- 遺物**
- ・城ノ越～須玖Ⅱ式土器、後期前半の土器
 - ・須恵器の坏身・蓋や埴など
 - ・中世土師器の坏と小皿、小刀

まとめ 本遺跡は多くの弥生遺跡がある駅館川東岸台地上に立地している。張り出しがある幅約3mの溝からは弥生後期前半頃の土器が出土しており、東上田遺跡や別府遺跡などと同じ環溝集落の一部（市内で6例目）であることが考えられる。これにより、駅館川の両岸には弥生前期～後期にかけて、宇佐独特の弧状の溝を伴った集落が変遷を遂げたことが明らかになった。また、大型柱穴による独立柱建物跡は櫓か倉庫などの特殊な建物が想定されるが、吉野ヶ里遺跡のものと比較すると規模は小さい。（佐藤）



調査区全景（東上空より）

28. 城井遺跡^{じょうい}

所在地	宇佐市大字城井	調査面積	280㎡
調査原因	市営住宅建設	担当者	林 一也
調査期間	951106～951127	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107049

位置 宇佐市の中央部である四日市市街地の北側に位置する。遺跡は微高地上に立地し、周辺には宇佐市有数の穀倉地帯が広がっている。

遺跡東側には葛原古墳と古墳時代後期の集落である葛原遺跡が、西側には扇塚古墳や古墳時代後期～古代の集落である吉松遺跡が位置している。

本年度は、昨年度調査区の南側において集会所の建設が計画されたので調査を実施した。



城井遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

遺構 調査区は、以前の住宅建設による造成でかなり削平を受けており、遺構の遺存状態はあまりよくなかった。東端部において弥生時代末頃の住居跡の一部が、その北側に時期不明の溝が1条検出された。

遺物 住居跡内部より弥生時代末頃の土器片数点とともに多量の炭が出土している。

まとめ 検出された住居跡内部からはかなりの量の炭が出土しており、火災にあったことが想定される。

本年度調査区は微高地の縁辺部に近いことや造成にともなう削平などにより、遺構の遺存状態はよくなかった。遺跡の中心は昨年度調査区から西側の畑地であるものと考えられ、遺跡の全容を解明するには広範囲な調査が必要である。

(林)



調査区全景 (北より)

だいのほる
29. 台ノ原遺跡

所在地	宇佐市大字四日市	調査面積	150㎡
調査原因	住宅建築	担当者	川谷 浩
調査期間	951006～951128	遺跡処置	調査後埋戻し
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107107

位置 駅館川による沖積地の西側に接した台地に立地する。これまで5次にわたる調査により弥生時代前期～中期を中心とする集落跡が明らかになっている。本年度は遺跡北端部について、弥生～古墳時代の集落や墓地の広がり进行を明らかにする目的で調査を行った。

遺構 第1トレンチでは、円形土坑1基（径約90m、深さ約1.2m）、溝1条（幅約80cm、深さ約15cm）を検出し、第2、3トレンチで溝が東西方向に直線的に延びることを確認した。南端部の第4トレンチでは、柱穴などの分布を確認した。

遺物 円形土坑より弥生時代中期後半の土器が少量出土し、溝より7世紀前半の須恵器などが出土した。

まとめ 集落の存在を示す多くの柱穴や土坑・溝などが確認された。台地縁辺部は比較的旧地形が残ることから、遺跡の広がりが予想される。
(川谷)

文献：宇佐市教育委員会「台ノ原遺跡6次調査」「宇佐地区遺跡群発掘調査概報Ⅷ」1996年



台ノ原遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)



調査区全景（東より）

30. 辻平遺跡

所在地	宇佐市大字南宇佐字辻平	調査面積	1,000㎡
調査原因	同窓会館建設	担当者	江藤 和幸
調査期間	950821～950929	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	新発見

位置 寄藻川により形成された低地に、宇佐神宮を中心に町(宇佐町)が形成されている。

遺跡はこの町の北東側丘陵上に立地する。付近には弥勒寺の瓦窯と推定される尻掛瓦窯や銅戈を出土した宇佐高校校庭遺跡、鎌倉～南北朝創建の古刹、大楽寺・円通寺がある。

遺構 弥生時代中期後半の土坑1基。弥生時代後期終末の竪穴住居跡7軒(内1軒は火災をうけていた)、土坑1基。

8世紀後半と思われる堀立柱建物1棟。

13～14世紀の土坑墓2基。

遺物 住居や土坑内から弥生式土器(甕・高坏など)。土坑墓内から青磁碗、刀子・砥石。

まとめ 隣接する宇佐高校校庭遺跡から銅戈が出土しており、当初から弥生時代の遺跡の存在が想定された。調査の結果、弥生の集落跡を確認した。住居跡に切り合いがみられる点から比較的長期間継続した集落と考えられる。しかし、集落と銅戈の関係は不明であり、今後の課題として残された。古代の建物は尻掛瓦窯の工房などの関連遺構であると想定される。また、付近に存在する宇佐神宮有力神官の菩提寺である大楽寺、円通寺には近世以前の墓石が現存しないことから、今回確認された土坑墓群はこれらの寺院に伴う墓地である可能性がある。(江藤)



辻平遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)



調査区全景(東より)

31. 畑田遺跡^{はたけだ}

所在地	宇佐市大字畑田字今在家屋敷	調査面積	520㎡
調査原因	住宅建築	担当者	佐藤良二郎
調査期間	950929	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107052

概要 駅館川の西側沖積地の中に発達した微高地上に立地している。遺跡はかつて弥生後期の土器などが出土していることから、弥生～古墳時代の集落跡と考えられている。

調査は集落の北端に接した畑地で実施したが、遺構や遺物は出土しなかった。(佐藤)



畑田遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

32. 別府遺跡^{ひつふ}

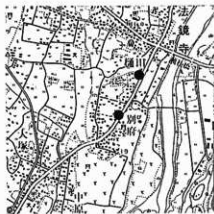
所在地	宇佐市大字南宇佐字宮迫	調査面積	200㎡
調査原因	住宅建築	担当者	江藤 和幸
調査期間	950919～951110	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107128

概要 駅館川の西岸に形成された微高地上に位置する。既往調査で朝鮮式銅鐸が出土し、環溝集落であることが確認されている。

今年度個人住宅が2カ所で計画されたため、調査を実施した。

いずれも時期不明の柱穴が散見される程度であり、構造物が地下の遺構に影響を及ぼさないので埋めもとして工事を実施した。

(江藤)



別府遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)

33. 別府遺跡

所在地	宇佐市大字別府	調査面積	300㎡
調査原因	住宅建築	担当者	川谷 浩
調査期間	950912～951020	遺跡処置	調査後埋戻し
調査主体	宇佐市教育委員会	台帳番号	107128

概要 国道10号南側の駅館川西側・自然堤防上に立地する。これまでの調査で縄文時代早期遺物包含層、弥生時代～平安時代の集落などが明らかになっている。

本年度は、遺跡南西部の畑地において、集落などの分布を探るため、調査を実施した。

遺構 古墳時代後期の竪穴式住居跡4軒と奈良～平安時代の土坑2基等が検出され、この内、重複した住居跡など3軒について調査を行った。

遺物 6世紀前半～後半の須恵器の坏、土師器甕、瓶、鉄鎌など。

まとめ 遺跡の北半部を中心とする弥生時代の遺構は検出されず、古墳時代後期の集落の一部を明らかにすることができた。

南隣接地でもほぼ同時期の集落の一部が発見されており、該期の住居跡などが遺跡南端部を中心に分布しているものと推測される。

(川谷)



別府遺跡位置図
(地形図「宇佐」使用)



調査区全景(東より)

文献：宇佐市教育委員会「別府遺跡10次調査」
「宇佐地区遺跡群発掘調査概報Ⅷ」1996年

34. ^{れんげじ}蓮華寺跡石造五輪塔

所在地	宇佐郡院内町大字小坂	調査面積	100㎡
調査原因	修復工事	担当者	渋谷忠章・村上 久和・染矢和徳
調査期間	960105～960117	遺跡処置	調査後修復
調査主体	院内町教育委員会	台帳番号	108003

概要 蓮華寺五輪塔（元徳三年銘）は、昭和51年に県指定有形文化財に指定されていたが、周辺の樹が五輪塔にからみ、斜めになっていた。そこで、解体修理の前に発掘調査を行った。その結果、本石塔は一辺3m前後の河原石の石敷きのほぼ中央の上に基礎石を置き、その上に五輪塔を置いていた。さらに、この五輪塔の北1m前後のところに常滑焼壺の完形品、それに接して石びつに入った土師質杯2枚が、五輪塔の南0.5mの所で土師器壺が出土した。



蓮華寺遺跡位置図
(地形図「下市」使用)

遺物 これらの遺物の調査結果、常滑壺から熟年男性の火葬骨1体分と経筒の蓋を転用したと考えられる鏡1枚が、五輪塔の塔身（水輪）からも熟年男性の火葬骨1体分が出土した。さらに土師器壺からも性別不明の火葬骨も出土している。

まとめ 時期は常滑壺が13世紀後半、五輪塔が10世紀前半と、この場所が墓地として使用されていたことが解り、石塔の銘文からこの石塔の被葬者が、宇佐宮と密接な関わりのある人物であることも判明し考古学上においても貴重なものと理解された。 (村上)

35. 奥城古墳 おくじょう

所在地	宇佐郡安心院町大字下毛宇奥城	調査面積	1000㎡
調査原因	道路建設	担当者	ノ野 勝教
調査期間	960313～960314	遺跡処置	一部保存
調査主体	安心院町教育委員会	台帳番号	109003

概要 過去の道路建設時に石棺3基が発見され、現在、道路に面した斜面に断面を観察することができる。

石棺は、今回道路の拡張で取り壊しになる予定であったが計画の変更を行い保存した。

しかし、今回拡張されるその周辺についてはトレンチを設定して調査を行ったが、遺物・遺構等は確認できなかった。(ノ野)



奥城古墳位置図
(地形図「下市」使用)

36. 小田地区 おだ

所在地	宇佐郡安心院町大字小田	調査面積	50000㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	ノ野 勝教
調査期間	951213～951220	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	安心院町教育委員会	台帳番号	

概要 調査地区は館川の支流津房川の右岸河岸段丘上に位置し、今年度の調査で縄文土器破片の出土した若林地区の南側に隣接する地区である。

調査は、トレンチ8本を設定し調査を行った。

その結果、遺物・遺構ともに検出なかった。(ノ野)



小田地区位置図
(地形図「豊後豊前」使用)

37. ^{かわさき}川崎・^{いたば}板場地区

所在地	宇佐郡安心院町大字川崎・板場	調査面積	109000㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	野 勝教
調査期間	951127～951208	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	安心院町教育委員会	台帳番号	

概要 調査地区は駅館川の支流津房川左岸の南から北へのびる小丘陵を東から北・西側へと取り巻く斜面等に位置する。

調査地に13本のトレンチを設定し調査を行った。その結果、少量の土器片等を確認しただけで遺構等は確認しなかった。(野)



川崎・板場地区位置図
(地形図「豊後豊前」使用)

38. ^{だいおつやしき}大仏屋敷遺跡

所在地	宇佐郡安心院町大字大仏屋敷	調査面積	8000㎡
調査原因	造成工事	担当者	野 勝教
調査期間	951011～951012	遺跡処置	現状のまま
調査主体	安心院町教育委員会	台帳番号	新発見

概要 遺跡は安心院盆地西南の台地に所在する。遺跡地の近くには石室が露出した鬼塚古墳等の遺跡が多く点在している。

調査は、トレンチを8本設定して遺跡の状況等を確認した。その結果、住居跡、土塹、溝等の遺構を検出した。(野)



大仏屋敷遺跡位置図
(地形図「下市」使用)

39. ^{つまがけおのだい}妻垣小野台地区

所在地	宇佐市安心院町大字妻垣小野台	調査面積	8000㎡
調査原因	老人ホーム建設	担当者	野 勝教
調査期間	950807～950808	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	安心院町教育委員会	台帳番号	

概要 遺跡は安心院盆地東方の通称妻垣台地北側に位置する。近くには小野ノ台古墳がある。

調査は、トレンチを7本設定し、調査をおこなった。

その結果、土器の細片を確認したが遺構は検出しなかった。遺跡は水田造成時に破壊されたと考えられる。(野)



妻垣小野台地区位置図
(地形図「下市」使用)

40. ^{なかやま}中山地区

所在地	宇佐郡安心院町大字中山	調査面積	25000㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	野 勝教
調査期間	951113～951117	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	安心院町教育委員会	台帳番号	

概要 調査地区は安心院盆地を流れる深見川の支流新貝川左岸の河岸段丘上に位置する。

調査は、トレンチ8本を設定して行った。

その結果、遺物・遺構は確認できなかった。(野)



中山地区位置図
(地形図「新藤」使用)

41. ^{わかばやし}若林遺跡

所在地	宇佐郡安心院町大字若林	調査面積	50,000㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	野 勝教
調査期間	951211～951215	遺跡処置	盛土保存
調査主体	安心院町教育委員会	台帳番号	新発見

概要 調査地区は駅館川の支流津房の右岸河岸段丘上に位置する。

調査は、19本の試掘坑を設定し行った。その結果、トレンチの1本より縄文土器破片等が出土したが遺溝の検出はなかった。

遺跡の取り扱いとしては、圃場整備での掘削が遺物出土の層には到達しないことを確認し、盛土保存とした。

この流域での縄文土器の出土は飯田二反田遺跡以来2例目である。(野)



若林地区位置図
(地形図「豊後高田」使用)

42. ^{あらお}荒尾地区

所在地	豊後高田市大字荒尾	調査面積	100㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	河野 典之・大久保謙一郎
調査期間	960212～960328	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	豊後高田市教育委員会	台帳番号	

概要 荒尾・払田条里は、市内を南東から北西に流れる桂川の支流都甲川が形成した沖積地に位置している。この条里は宇佐八幡宮の神宮寺である弥勒寺の荘園「都甲荘」の中核をなすものであり、各時代にわたる遺跡の存在が予想された。調査は平成5年度からの継続であり、今年度は大区画の中の約100㎡について、条里遺構以外の遺構の確認を目的として試掘調査を行った。

試掘調査の結果、水田となり得る地層の確認はできたものの、その他の遺構・遺物については検出されなかった。これは調査区が条里のほぼ中心地の比較的低位に設定されたために、水田の形成には適した箇所であっても、居住するには多少不利な地形であったためと思われる。(河野・大久保)



荒尾地区位置図
(地形図「豊後高田」使用)

43. 荒尾・払田条里

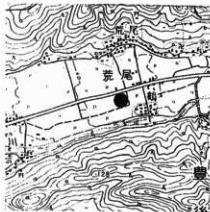
所在地	豊後高田市大字荒尾	調査面積	100㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	河野 典之・大久保謙一郎
調査期間	960212～960328	遺跡処理	計画通り施工
調査主体	豊後高田市教育委員会	台帳番号	102078

位置 荒尾・払田条里は、市内を南東から北西に流れる桂川の支流都甲川が形成した東西に細長い沖積地のほぼ全域に位置する。平成5年度から調査を行っている。今年度の調査は条里地割のほぼ中央部が調査対象となった。

遺構 水田跡5層。弥生時代後期から現在までの水田層が確認された。

遺物 水田層の本調査のため、遺物はほとんど出土していない。唯一、弥生時代後期の土器が水田の水口と思われる位置より出土した。器種は高坏、壺等である。

まとめ 平成5年度から荒尾・払田条里として本調査を実施してきたが、河川に対して垂直に長大なトレンチを設定することによってその断面観察から古地形の復元すること、また条里にいたる土地利用の変遷を層で確認すること等の調査が主体であったため、水田層の面としての調査は今回がはじめての試みとなった。調査の結果、水口と比定される遺構より出土した遺物から、少なくとも弥生時代後期には水稻耕作が行われていたことが確認された。しかしながら、条里施行時期の出土遺物は極端に少なく、また条里施行時の祭司遺構なども検出されなかったため、条里施行時期の特定はできなかった。今後の調査課題としたい。
(河野・大久保)



荒尾・払田条里位置図
(地形図「豊後高田」使用)



荒尾・払田条里水田検出状況

文献：河野和夫・飯沼賢司編

- 『豊後國部甲庄の調査(本編)』
- 大分県立宇佐歴史民俗資料館報告書第11集
- 大分県立宇佐歴史民俗資料館 1993年
- 河野典之・大久保謙一郎「荒尾地区」
- 『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報Ⅹ』
- 豊後高田市教育委員会 1994年 pp.12～14
- 河野典之・大久保謙一郎「荒尾地区」
- 『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報Ⅺ』
- 豊後高田市教育委員会 1996年 pp.13～14

44. 岩脇寺

所在地	豊後高田市大字横崎字岩脇	調査面積	10,000㎡
調査原因	六郷山寺院遺構確認調査	担当者	原田昭一
調査期間	951001～951130	遺跡処置	
調査主体	宇佐風土記の丘歴史民族資料館	台帳番号	102120

位置 本山末寺の一つである日野山岩脇寺は尾崎川と丘陵に挟まれた狭隘な平野部の北端に崖を背にして営まれた寺院である。

遺構 今回の調査は岩脇寺伽藍及び周辺の測量調査を行ったが、現在は本堂の背後に屹立する岩壁に岩屋を掘削し、六所権現・奥の院をはじめとした寺院施設を設けている。本堂周辺には鐘楼と庫裡跡・護摩堂跡・納屋跡などが確認でき、周辺の歴史的環境の聞き取り調査では、中興の祖とされる浄眼和尚の墓をはじめ数箇所において寺院関連の施設が確認できた。ただ、中世まで溯ると考えられるものは

六地藏菩薩と尊像不明の六体の仏像を刻んだ磨崖仏とその前面におかれる宝篋印塔には応永33年(1426)の紀年銘がみられ、いずれも岩屋周辺にのみ確認できる。建武4年(1337)の『六郷山本中末次第並四至等注文案』では当寺に対して「日野岩屋」と呼ばれており、当寺が本来、岩屋部分においてのみ寺院としての機能をはたしていたことがわかる。

また、当寺では大正期まで修正鬼会が行われていたと伝えられ、鬼会面も残っているため修正鬼会の調査も併せて行った。

(原田)



岩脇寺位置図
(地形図「岡子山」使用)

文献：大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ』1996年



岩脇寺遺景

45. 真木^{まきのおおどう}大堂

所在地	豊後高田市大字真中字真木	調査面積	300㎡
調査原因	六郷山寺院遺構確認調査	担当者	原田昭一
調査期間	951001～951030	遺跡処置	
調査主体	宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	台帳番号	102155

位置 本山本寺である馬城山^{まじょうじ}伝乗寺の跡と伝えられる真木大堂は田染盆地の西に位置する馬城山の麓に当面してみられる。現在は、大威徳明王をはじめとした仏像群を除き、古代・中世に遡る寺院遺構は全く確認されていない。

遺構 「桜馬場」と呼ばれる真木大堂参道横の畑地に2ヵ所の調査区を設定し、発掘調査を行った。1トレンチからは近世以降の柱穴群が検出されたため、その遺構面より下には調査の手を及ぼすことはできなかった。また2トレンチでは1トレンチで検出された遺構面の下の調査を行い、中世に属すると思われる柱穴が検出できた。



真木大堂位置図
(地形図「若宮」使用)

遺物 1・2トレンチとも遺物包含層が確認でき、中世期の土師質土器杯・皿や青磁・白磁の細片が出土しているが、遺物包含層の明確な時期を断定でき得る資料は見られない。

まとめ 現在の真木大堂には、仏像群を除き、本来、馬城山伝乗寺に関する遺構・遺物はほとんど見られない。真木大堂参道である「桜の馬場」の端に置かれていた中世の板碑・石幢も伝乗寺に関係するものかどうかは断言できず、他所から持ち込まれた可能性が高い。また、今回、2トレンチで発見された遺構群については中世のものであることは分かるが、寺院と結び付ける確証は全く得られなかった。(原田)

文献：大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ』1996年



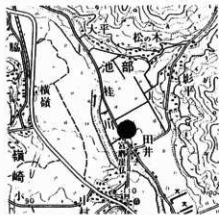
真木大堂駐車場1トレンチ

46. としのかみ
トシノ神遺跡

所在地	豊後高田市大字池部字年ノ神	調査面積	400㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	河野典之・大久保謙一郎
調査期間	960104～960209	遺跡処置	現状保存
調査主体	豊後高田市教育委員会	台帳番号	102124

概要 真中地区は市内を南東から北西に流れる桂川の上流部、田染盆地の右岸を占める。トシノ神遺跡は右岸の上位段丘上に位置し、弥生時代後期から古墳時代の遺跡として周知されていた。平成6年度の試掘調査では2基の石棺墓が検出されている。

試掘調査の結果、北側の排水路予定地から水田に伴うと思われる浅い溝が2本検出された。南側の排水路予定地からは遺構は検出されなかったが、多くの遺物が出土した。また、平成6年度に検出された1号石棺墓周辺からは新たに2基の石棺墓が検出され計4基となった。遺物としては1号石棺墓から短剣が1点出土している。時期は弥生時代後期頃に位置付けられる。



トシノ神遺跡位置図
(地形図「両子山」使用)

文献 宮内克己「考古資料から見た田染盆地」

- (1) 先史〈縄文～古墳時代〉『豊後國田染荘の調査』
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第3集

- 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
1986年 pp.25～26
河野典之・大久保謙一郎「トシノ神遺跡」
『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』
豊後高田市教育委員会
1995年 pp.11～14
河野典之・大久保謙一郎「トシノ神遺跡」
『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』
豊後高田市教育委員会
1996年 pp.9～12



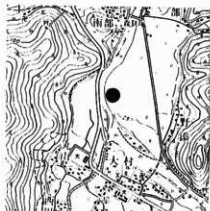
トシノ神遺跡石棺群

まつもと
47. 松本遺跡

所在地	豊後高田市大字佐野字松本	調査面積	40㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	河野典之・大久保謙一郎
調査期間	950801～950803	遺跡処置	現状保存
調査主体	豊後高田市教育委員会	台帳番号	102161

概要 佐野地区は応利山の東側、市内を南東から北西に流れる桂川が中流域で大きく蛇行するその兩岸を占め、松本遺跡は右岸の河岸段丘上に位置する。平成6年度の試掘調査で多数の土塊、ピットが確認されている。

本年度は平成6年度に試掘調査できなかった2ヶ所にトレンチを設定した。各トレンチともピット等が検出され、遺跡がさらに南北に延びることが確認された。遺物については本年度出土遺物には時期を示すようなものはなく、平成6年度出土遺物でみればほぼ弥生時代中期頃に位置付けられる。(河野・大久保)



松本遺跡位置図
(地形図「豊後高田」使用)

もりた
48. 森田遺跡

所在地	豊後高田市大字弘田字森田	調査面積	450㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	河野典之・大久保謙一郎
調査期間	950220～950417	遺跡処置	現状保存
調査主体	豊後高田市教育委員会	台帳番号	新発見

概要 森田遺跡は市内を流れる桂川の支流都甲川右岸の沖積層地域に位置し、荒尾・弘田条里内のほぼ中央にあたる。ここは宇佐神宮神宮寺である弥勒寺の荘園で、国東半島に広がった弥勒寺領荘園浦部十五荘の一つ都甲荘の故地であり、国東半島で最も条里遺構の保存状態の良い条里遺構である。

試掘調査は1.5m×15mのトレンチを20本設定した。

試掘調査の結果、遺構には伴わないが多数の縄文時代後期の土器片が出土した。

また、竪穴式住居跡が2基検出され、住居跡内から多数の土器片が出土した。竪穴式住居跡の時期は、出土した遺物からみて弥生時代後期頃と思われる。(河野・大久保)



森田遺跡位置図
(地形図「豊後高田」使用)

49. ^{あろくでん}三六田遺跡

所在地	豊後高田市大字弘田字三六田	調査面積	500㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	河野典之・大久保謙一郎
調査期間	950824～951130	遺跡処置	一部保存・一部計画通り施工
調査主体	豊後高田市教育委員会	台帳番号	新発見

位置 三六田遺跡は、市内を流れる桂川の支流都甲川が東から西にむかって形成した、東西に細長い沖積地のほぼ全域に広がる荒尾・弘田条里内の西端に位置する。荒尾・弘田条里は宇佐神宮神宮寺である弥勒寺の荘園都甲荘の故地である。

遺構 縄文：土坑1（円形竪穴式遺構？）
 古代：独立柱建物跡3棟以上、ビット多数、土坑3基以上

遺物 縄文：土坑内から縄文後期と思われる土器が多数出土した。
 古代：ビット・土坑内から須恵器片が少量出土した。

まとめ 縄文時代後期の土器が出土した土坑については、東側の調査区外に遺構が続くため遺構全面の検出はできなかったが、ほぼ円形をした土壇と思われる。また、東側の調査区外でも、同じ時期の土器片が表採資料として出土しており、東側の調査区外にまで縄文時代後期の遺跡が広がっていると想定される。

古代の遺構については、確認できる独立柱建物跡は2間×2間の総柱建物跡であり、建物跡の方位から2つの時期に分けられよう。また、試掘調査により上流からビット・溝が確認されており、下流からも条里調査を行ったトレンチからは多数の須恵器片が出土している。このことは本調査地区周辺にも遺跡が広がっていることを示唆するものと思われる。（河野・大久保）



三六田遺跡位置図
 (地形図「豊後高田」使用)

- 文献**：真野和夫・飯沼賢司編
 『豊後國都甲荘の調査（本編）』
 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第11集
 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
 1993年
 河野典之・大久保謙一郎「荒尾地区」
 『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報Ⅹ』
 豊後高田市教育委員会 1994年 pp.12～14
 河野典之・大久保謙一郎「荒尾地区」
 『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報Ⅺ』
 豊後高田市教育委員会 1996年 pp.13～14



三六田遺跡全景

50. ^{かみどの}上殿遺跡A地区

所在地	豊後高田市大字佐野字上殿	調査面積	10,000㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	河野典之・大久保謙一郎
調査期間	950717～960329	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	豊後高田市教育委員会	台帳番号	102162

位置 上殿遺跡A地区は応利山の東側、豊後高田市内を南東から北西に流れる桂川が中流域で大きく蛇行する右岸に形成された沖積層地域のほぼ中央部、旧河川右岸の段丘上に位置する。ロストル式平窯であるカワラガマ遺跡1号窯とは鞍掛城跡を挟んで北西に位置する。

遺構 古代：掘立柱建物跡42棟以上・樺列跡4本以上・ピット多数・土坑12基以上・溝1条。
 中世：溝4条以上。
 近世以降：溝4条。



上殿遺跡A地区位置図
(地形図「豊後高田」使用)

遺物 古代：ピット及び溝から多数の須恵器片が出土した。特に溝からは多量の須恵器片と共に太刀金具、ピンセット型青銅器等の青銅製品、土馬等が出土した。またピットからは多くの柱根が出土した。
 中世：溝の中から中世の土器片が少量出土した。
 近世以降：溝の中から近世以降の土器片がわずかに出土した。

まとめ 掘立柱建物跡は建物方位より大きく2つの群に分けることができる。また各群の総柱建物跡は同じ位置に同一方位で各一回建替えが行われているので、掘立柱建物跡群は4時期に分けることができる。また、これらの掘立柱建物跡群は出土遺物からみてほぼ8世紀代に比定できる。
 中世以降の溝については水田に伴うものと思われる。(河野・大久保)



上殿遺跡A地区全景

文献：河野典之・大久保謙一郎「上殿遺跡」
 『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』
 豊後高田市教育委員会 1995年 pp.9～10
 河野典之・大久保謙一郎「上殿遺跡B地区」
 『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』
 豊後高田市教育委員会 1996年 pp.6～8

51. ^{かみどの}上殿遺跡B地区

所在地	豊後高田市大字佐野字稲葉	調査面積	90㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	河野典之・大久保謙一郎
調査期間	950801～950803	遺跡処置	現状保存
調査主体	豊後高田市教育委員会	台帳番号	新発見

概要 佐野地区は応利山の東側、市内を南東から北西に流れる桂川が中流域で大きく蛇行するその両岸を占め、上殿遺跡B地区は右岸の沖積層地域の中のほぼ中央部、旧河川右岸の段丘上に位置する。平成6年度の試掘調査で確認された上殿遺跡A地区の北側を占める。試掘調査の結果、多数のピット等が検出され、いくつかの独立柱建物群の存在が予想される。遺構は平成6年度に確認された上殿遺跡A地区のある段丘上の、小さな谷状の鞍部を挟んだ北側に位置し、大きくは一連の遺跡であると思われる。遺物については上殿遺跡A地区同様ほぼ8世紀に位置付けられる。

(河野・大久保)



上殿遺跡B地区位置図
(地形図「豊後高田」使用)

52. ^{あかまつ}赤松遺跡

所在地	西国東郡大田村大字杵掛	調査面積	2000㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	後藤一重
調査期間	960206～960209	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	110037

概要 調査対象地区は桂川と石丸川が合流する地点で、大田村最大の沖積地を形成する。桂川沿いのやや上流部には、古城得遺跡、小川原遺跡、岡の前遺跡、灰土山古墳群などがあり、当地区が弥生時代から中世に至るまで地域の中核を担っていたことが分かる。試掘調査の結果、当初予想された程の遺跡は確認されず、桂川左岸で赤松遺跡が確認されたのみである。

(後藤)



赤松遺跡位置図
(地形図「若宮」使用)

文献：『大分県内遺跡発掘調査概報』4
大分県教育委員会 1996年

53. 貴戸ノ前遺跡（真玉氏居館跡）

所在地	西国東郡真玉町大字西真玉字貴戸ノ前	調査面積	3500㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	下村 精一
調査期間	950701～960317	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	真玉町教育委員会	台帳番号	111017

位置 遺跡は真玉川下流の南にあたる台地に位置する。この台地には中世の真玉氏居館跡（県指定史跡）が今も堀を残している。

遺構 A区

掘立柱建物跡－5棟
溝－4条

B区

掘立柱建物跡－1棟
井戸－1基

C区

掘建柱建物跡－5棟
溝－2条
土坑－1基

D区

掘建柱建物跡－3棟
井戸－1基
近世墓－1基
溝－1条
土坑－1基

遺物 全体から中世の土師器片が出土する。
C区土構より土師器の小皿、埴が出土する。

まとめ 調査は圃場整備に伴う削平箇所の為、全容は見えないものの、居館跡の隣接地には集落の密度が高いことが判った。（下村）



貴戸ノ前遺跡位置図
(地形図「真」使用)



調査区全景（上空より）

54. ^{わだばな}和田鼻遺跡

所在地	西国東郡真玉町大字西真玉字和田鼻	調査面積	1600㎡
調査原因	県営園場整備事業	担当者	下村 精一
調査期間	950924～960107	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	真玉町教育委員会	台帳番号	新発見

位置 真玉町の西端は海に面し、海岸線は幾重にも入り江をなす。しかし南端部は近世以降干拓が行われ海岸線は跡を残さないものの、旧海岸線なごりが残る。遺跡はこの旧海岸線の突き出た部分に当たる。

遺構 古墳8基（4C～6C）
祭祀土坑 3基

遺物 須恵器
土師器（タコ壺、甕底部）
鉄刀
菅玉
鉄鏃



和田鼻遺跡位置図
(地形図「浜」使用)

まとめ 遺跡の立地する台地は、近世頃に開発が行われ、畑地にされたと考えられる。古墳は、この開発時にほとんどが破壊されており、一部の石材と周溝を確認するものである。又、開発時に古墳内部も盗掘にあったと思われる、出土品も少ない。この遺跡の周辺は発掘調査例がなく、周辺地域の状況は明らかではないが、海岸線に沿う入り江の北側には大塚古墳、南側には野内古墳と前方後円墳が位置しており、この周辺の海岸部を中心に古墳時代の遺跡が存在することは間違いない。

(下村)



調査区全景（上空より）

55. 早田地区（殿屋敷）

所在地	西国東郡香々地町大字香々地字早田	調査面積	92㎡
調査原因	六郷山寺院遺構確認調査	担当者	原田 昭一
調査期間	950715～950830	遺跡処置	
調査主体	宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	台帳番号	

位置 早田地区の地形をみると、丘陵部から狭隘な谷部に降りる地形変換点の微高地上に位置している。今回、発掘調査の対象とした畑地が「殿屋敷」というシコナをもち、居館が存在していた可能性を念頭に置きながら調査に臨んだ。

遺構 トレンチを4カ所に設定して調査を行ったが、耕作土の深浅はあるもののいずれのトレンチにおいても耕作土下に地山がひろがり、遺構は全く確認できなかった。このように遺構は全く確認できなかったが、石塔群の残骸が調査区南東端の一角に集積されており、石塔の規模として最も大きい町指定有形文化財の「早田国東塔」をその前面に組み立てている。集積された石塔の種類も国東塔をはじめ五輪塔・板碑などがみられ、「殿屋敷」上段の畑地や南側の天満宮境内、さらには北側約200mに位置する早田観音堂周辺にみられる石塔類も「殿屋敷」の畑地から移動したと伝えられており、本来、「殿屋敷」にはかなりの数にのぼる石塔群が存在したものと推測できよう。

遺物 出土遺物は各トレンチから縄文土器底部片・姫島産黒曜石・黒色黒曜石・青磁碗・近世磁器・土師質土器・瓦質土器・青磁碗・鉄滓などが出土しているが、土器類はほとんど細片であった。（原田）

文献：大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
『豊後国香々地荘3』1996年



早田地区位置図
（地形図「香々地」使用）



殿屋敷石塔群

東国東・速見地域



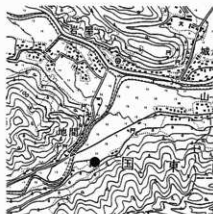
56. ^{くちでらだ}口寺田遺跡

所在地	東国東郡国東町大字赤松字口寺田	調査面積	3600㎡
調査原因	県営園場整備事業	担当者	永松みゆき
調査期間	950710～950809	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	国東町教育委員会	台帳番号	新発見

位置 田深川支流横手川右岸の丘陵斜面標高約50mに位置している。遺跡は、切り土部分のみを調査したので、遺跡の中心は盛り土部分の未調査区の可能性が高い。

遺構 中世の柱穴群、土坑

遺物 土師器小皿完形1個、土師器細片少量、輸入陶磁器少量、表採で石鑿1点（永松）



口寺田遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)



口寺田遺跡全景

57. 岩戸寺 いわとじ

所在地	東国東群国東町大字岩戸寺字寺迫	調査面積	20000㎡
調査原因	六郷山寺院遺構確認調査	担当者	原田 昭一
調査期間	951215～960228	遺跡処置	
調査主体	宇佐風土記の丘歴史民族資料館	台帳番号	217001

位置 末山分末寺である岩戸寺は来浦川がはしる大字岩戸寺から北側に小さな谷部が延び、その谷奥に伽藍が広がる。

遺構 今回の調査は岩戸寺境内周辺の測量調査を行ったが、参道両側には坊跡が残り、参道の上部に六所権現・奥の院・岩屋・講堂がみられる。六郷山寺院の中では伽藍遺構を最も良く残す寺院の一つに教えられる。坊跡は参道両側にもみられるが、大字岩戸寺の集落内にも4カ所確認でき、関連寺院施設ともあわせて調査を行った。現在の本堂・庫裡は大門坊跡に建てられており、その上段の畑地が院主坊跡の伝承地である。この畑地からは中世期の土器群が現住職の手により採集されており、今後は発掘調査など考古学的調査により、その実態が明らかになっていくであろう。

(原田)

文献：大分県立宇佐風土記の丘歴史民族資料館『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ』1996年



岩戸寺位置図
(地形図「蒼々地」使用)



岩戸寺遠景

58. 後畑・後迫遺跡

所在地	東国東郡国東町大字富来浦	調査面積	1000㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	永松みゆき
調査期間	950907～950913	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	国東町教育委員会	台帳番号	新発見

概要 平成7年度県営圃場整備事業羽田地区の実施に伴い試掘調査を行った。

遺跡は、富来城の北西部約1kmの所で周防灘に面した緩やかな斜面に位置している。後畑遺跡では、中世の土坑墓と数個のピットが検出された。後迫遺跡では、中世の鍛冶遺構が検出された。遺跡の取扱いについては、保存が困難な部分について本調査を実施することとした。(永松)



後畑・後迫遺跡位置図
(地形図「富来市」使用)



後畑遺跡全景

59. ^{だいおんじ}大恩寺遺跡

所在地	東国東郡国東町大字大恩寺	調査面積	1500㎡
調査原因	道路改良事業	担当者	五十川孝正
調査期間	960214～960320	遺跡処置	来年度継続調査
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	217015

位置 大恩寺遺跡は国東町北部を流れる富来川中流の河岸段丘上に位置し、弥生時代と中世の遺物を包蔵する遺跡として知られている。調査区に隣接する地区は、平成7年度に同事業で発掘調査を行っており、弥生時代中期の竪穴住居跡、中世墓を確認している。今回の調査は前回調査で確認された遺跡の拡大が想定されたため実施した。調査区内の土層堆積状況は表土層（第Ⅰ層）－褐色弱粘質土層（第Ⅱ層）－灰色砂礫層（第Ⅲ層）－灰色砂層（第Ⅳ層）の順である。



大恩寺遺跡位置図
(地図形「鶴川」使用)

遺構 Ⅱ層上面から竪穴住居跡1基、土坑3基、溝状遺構1条を確認した。

遺物 出土遺物の量は少ないが、土坑から弥生時代中期前半の甕、高環がまとまったかたちで出土しており、祭祀に関係する可能性が高いと考えられる。

まとめ 今年度の調査は調査対象面積の半分であり、調査区の状況を十分に把握できないが、試掘調査などの結果から、遺跡は拡大していくものと推定される。
(五十川)

60. ^{はらしろうまる}原七郎丸遺跡

所在地	東国東郡国東町大字原字七郎丸	調査面積	28000㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	永松みゆき・藤本 啓二
調査期間	950612～960118	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	国東町教育委員会	台帳番号	217053

位置 田深川と横手川の分岐点近くの横手川右岸の河岸段丘上、標高約27mに位置している。遺跡は、東西400m、南北70mの微高地全面の広い範囲に及んでいる。南側の丘陵の間には旧河道が確認された。西側隣接地には、初八板社が鎮座している。

遺構 縄文早期の包含層、集石遺構、古代建物跡、中世建物跡、溝（用水路）、土坑墓、土坑、鍛冶炉及び鍛冶工房跡

遺物 縄文早期…押型文土器、無文土器、注口土器、石鏃、石斧、石匙、叩石
 古代…土師器、須恵器
 中世…土師器、瓦器、雑器、輸入陶磁器、和鏡、鉄器、銅銭

まとめ 遺跡は、中世国東郡の中心と考えられる諸富名の一部に比定される地域であるため地形環境、文献調査、水田水利、小字境等の記録保存も実施している。約30,000㎡に及ぶ調査区からは、時期の異なる中世の用水路と考えられる溝が調査されており、中世の水田開発史を考える上で重要な資料となる。

(永松・藤本)



原七郎丸遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)

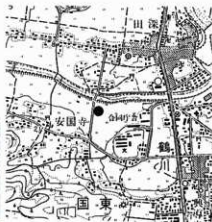


原七郎丸遺跡全景

61. 古殿遺跡

所在地	東国東郡国東町大字安国寺字古殿	調査面積	1000㎡
調査原因	道路拡幅	担当者	永松みゆき
調査期間	951107～951115	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	国東町教育委員会	台帳番号	新発見

概要 平成7年度町道改良工事鶴川～田深線の実施に伴い試掘調査を行った。遺跡は田深川右岸の河岸段丘端部に位置している。ここから中世の溝と数個のピットが検出された。遺物は土師器小皿、坏が溝から多量に検出された。遺跡の取扱いについては、遺構が検出された部分について本調査を実施することとした。(永松)



古殿遺跡位置図
(地形図「鶴川」使用)

62. 今市城跡

所在地	東国東郡武蔵町大字成吉字城	調査面積	4296㎡
調査原因	中学校造成工事	担当者	神崎 哲也
調査期間	960216～960219	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	武蔵町教育委員会	台帳番号	218006

概要 調査対象地は周知遺跡今市城跡の範囲内の北側に位置する。調査は対象地全面の表土を取り除いて行ったが、明確な遺構を確認できなかった。調査対象地は現状が段状の耕作地であり、過去の耕地化に伴う造成時に遺構面が消滅したと思われる。(神崎)



今市城跡位置図
(地形図「鶴川」使用)

63. 報恩寺

所在地	東国東郡武蔵町大字麻田字中平	調査面積	20000㎡
調査原因	六郷山寺院遺構確認調査	担当者	原田 昭一
調査期間	951215～960130	遺跡処置	
調査主体	宇佐風土記の丘歴史民族資料館	台帳番号	218004

位置 末山末寺の一つに数えられる報恩寺は、報恩寺は北側の武蔵川の、南側の丘陵に挟まれた狭隘な空間にみられ、その伽藍配置も本堂・庫裡・観音堂・山門などが広がりをもたず集中していることがわかる。

遺構 報恩寺境内周辺並びに歴代住職の基地の測量調査を行ったが、報恩寺伽藍の丘陵側には中世後半の石塔群がみられ、その南側には長い石段の奥付きに三所権現も祀られている。当時の調査で注目されるべきことは、歴代住職の墓地が2カ所に確認できるが、当寺中興の祖とされる可春の墓がみられる基地には、中世末から近世初頭に営まれたと考えられる配石墓が数多く認められる事である。国東半島一帯に確認できる類似遺構の実態の解明は今後の課題であり、当寺の配石墓群はその良好な資料となろう。(原田)



報恩寺位置図
(地形図「鶴川」使用)



報恩寺遺景

文献：大分県立宇佐風土記の丘歴史民族資料館「六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ」1996年

64. 丸小野寺

所在地	東国東郡武蔵町大字丸小野字岡	調査面積	20000㎡
調査原因	六郷山寺院遺構確認調査	担当者	原田 昭一
調査期間	951201～960130	遺跡処置	
調査主体	宇佐風土記の丘歴史民族資料館	台帳番号	218001

位置 中山末寺の一つに数えられる丸小野寺は、麻田川上流の狭隘な谷部の北面する斜面に位置している。

遺構 今回の調査は丸小野寺伽藍及び周辺の測量調査を行ったが、丘陵斜面をのぼる参道には、石畳が続き、石畳が終わる位置に本堂・庫裡がみられる。本堂・庫裡より上側の参道は現在の林道により一部分断されているが、最奥部には、歳神社をはじめとする三神が、またその横には丸小野寺講堂と三所権現がみられる。講堂の南側には14世紀中頃の康永年間の年号をもつ板碑が2基建てられている。現在、山門横に置かれている国東塔は本来、板碑に隣接して置かれていたと言われており、中世期の石塔群は本来、講堂周辺に集中していたことがわかる。今回の調査で注目されることは『丸小野寺記録編纂材料』にみられる東光寺の存在である。それによれば丸小野寺の前身となる中世期の寺院であり、その伝承地も大字丸小野字岡に確認できる。今回の調査では、この東光寺跡伝承地も測量図に残し、丸小野寺の関係を考えてみた。 (原田)



丸小野寺位置図
(地形図「鶴川」使用)



丸小野寺遠景

文献：大分県立宇佐風土記の丘歴史民族資料館『六郷山寺院遺構確認調査報告書IV』1996年

65. ^{おまた}小俣地区

所在地	東国東郡安岐町大字小俣	調査面積	42000㎡
調査原因	県営團場整備事業	担当者	松本 啓子
調査期間	950918	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	安岐町教育委員会	台帳番号	

概要 小俣地区は両子山から放射線状に伸びる河川のひとつ小俣川沿いに位置する。両子山からの距離は約5kmであり、河川から山際までの距離は短い。試掘調査では、対象面積に1.5×20mのトレンチを計9本入れた結果、その一部から鉄滓を検出した。このことによりトレンチを拡張したが、他に遺構、遺物等を検出するには至らなかった。しかし、鉄滓が出土したことより、この周辺に鉄関連の施設が存在した可能性がある。(松本)

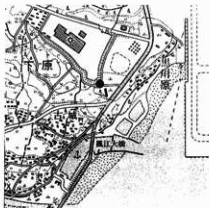


小俣地区位置図
(地形図「両子山」使用)

66. ^{しもばる}下原地区

所在地	東国東郡安岐町大字下原字金ユリ	調査面積	200㎡
調査原因	無線基地局建設	担当者	松本 啓子
調査期間	950901	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	安岐町教育委員会	台帳番号	

概要 今回試掘調査した下原地区は、大分空港から約300m南に位置し、大分キャノンや野球場などが隣接する。周辺には前方後円墳を呈する下原古墳、永祿～慶長期の平城の縄張りを知ることのできる安岐城跡などがある。調査面積約200㎡に幅1.5×10m、深さ50～70cmのトレンチを数本入れたが、遺構・遺物を確認するには至らなかった。(松本)



下原地区位置図
(地形図「下原」使用)

67. ひろなが 広永遺跡

所在地	東国東郡安岐町大字吉松	調査面積	92000㎡
調査原因	県営圃場整備事業	担当者	松本 啓子
調査期間	951129～951130	遺跡処置	一部工法変更
調査主体	安岐町教育委員会	台帳番号	新発見

概要 広永遺跡は町の中心部を流れる安岐川の支流吉松川の左岸に位置する。広永遺跡がある吉松地区は安岐川下流域の広大な平野に接しており、周辺には吉松市場遺跡、一の瀬古墳などがある。広永遺跡は試掘調査により、弥生時代～古墳時代と思われる住居跡を3基、黒色の包含層から中世以降の土器片を検出した。これにより範囲を広げ遺構、遺物の確認を行ったが、それ以上の広がりはなかった。今回遺構が一ヶ所に集中していたため、東国東地方振興局との協議（工法変更）により遺跡の保存が可能となった。（松本）



広永遺跡位置図
(地形図「下原」使用)

68. ^{みつひろ}光広遺跡

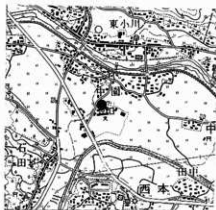
所在地	東国東郡安岐町大字中園字城畑	調査面積	500㎡
調査原因	道路建設	担当者	松本 啓子
調査期間	960205～960331	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	安岐町教育委員会	台帳番号	219016

位置 光広遺跡は大分空港から南西方向へ約4km豊後高田安岐線と町道中学校線とが交わる北側に位置する。遺跡の北約100mのところには安岐町の中心部を走る安岐川が流れ、遺跡周辺には水田が広がる。今回の調査区より約200m南には平成元年に本調査した地区があり、そこからは弥生時代中期から後期後半の柱穴跡を検出し、多数の遺物が出土した。

遺構 今回は県道糸原杵築線工事に伴い試掘調査を行ったが、その結果、柱穴等を検出したため本調査を実施することとなった。本調査は約500㎡を対象に実施し、14～16世紀を中心とする柱穴のほか、土坑土坑墓等を検出した。

遺物 遺物は柱穴からは杯、碗などが出土し、土坑墓からは被葬者の歯が検出された。また土坑墓脇からは小皿を数点確認している。

まとめ 光広遺跡では数多くの柱穴を検出しており、建て替えが何度も行われたようである。しかし、周辺は湿地帯でもあり、川の氾濫を受けやすい位置にあることから生活の場としては長続きはしなかったようである。そして生活の場が消滅した後、墓が造られた可能性が高い。(松本)



光広遺跡位置図
(地形図「下原」使用)



69. 杵築城下町遺跡（藩校学習館）

所在地	杵築市大字杵築字北台	調査面積	50㎡
調査原因	藩校模型学習館設置工事	担当者	平川 信哉・後藤 方彦
調査期間	950731～950831	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	杵築市教育委員会	台帳番号	213118

位置 市中心部を流れる八坂川と高山川に挟まれた台地上に立地し、天明五（1785）年に開設された藩校学習館跡や上級武士の邸宅が今なお残っている。

遺構 礎石と考えられる点石、溝1条

遺物 近世から昭和にいたる土器数点と瓦多数

まとめ 廃藩置県後、杵築小学校用地として使用されており、校舎や奉安殿が一時期立地していたり、庭木の移植が何度も行われ、相当攪乱を受けていることを考えると、礎石と考えられる点石も藩校学習館に直接結びつくかどうかは不明である。（平川・後藤）



杵築城下町遺跡（藩校学習館）位置図
（地形図「杵築・住吉浜・若宮・下原」使用）

70. 東光寺経塚群

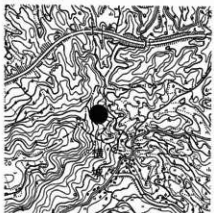
所在地	杵築市大字横城字立ヶ鼻	調査面積	50㎡
調査原因	土砂採取	担当者	平川 信哉・後藤 方彦
調査期間	960214～960329	遺跡処置	現状保存
調査主体	杵築市教育委員会	台帳番号	213072

位置 市内東部の標高130mの丘陵に立地し、安岐町との境界に近接している。現東光寺本堂の裏手に位置する。周囲は、建築資材の真砂土が産出されるところで、遺跡周辺もかなり現地形の改変を受けている。

遺構 平成4年度に確認されている遺構の中に新たに1基の経塚遺構を確認した。

遺物 陶製経筒1及び和鏡1 （平川・後藤）

文献：平川信哉・後藤方彦「杵築地区遺跡群発掘調査概報Ⅷ」1996年



東光寺経塚群位置図
（地形図「下原」使用）

71. ^{リョウズ}龍頭遺跡

所在地	速見郡日出町大字野原	調査面積	900㎡
調査原因	道路建設	担当者	吉田 寛
調査期間	950412～950908	遺跡処置	計画通り施工・遺構は埋土保存
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	221038

位置 遺跡は北側を丘陵、南側を河川（八坂川）に区切られた標高約100mの沖積地上に位置する。

遺構 ドングリピットと通称される貯蔵穴約60基。その大半は出土遺物から、縄文時代後期前半に比定される。また、縄文時代の遺構面の上層に弥生時代中期および古代の包含層が存在する。

遺物 ドングリピット内部からカン類を主体としたドングリが多量に出土。その他、注目されるものとして、編物製品（編袋）が7点以上出土している。縄文土器・石器・弥生土器・須恵器・土師器なども出土。

まとめ 多数のドングリピットが検出されており、縄文時代の食料貯蔵の具体像を検討する上で極めて重要な遺跡となった。ドングリの運搬や貯蔵に使用されたとされる編物製品（編袋）も良好な資料が多く、今後の検討が期待される。なお、県道工事は予定通り行われたが、遺構の検出面が工事面より下位に存在したため、遺構は破壊されず、埋土により道路下に保存された。（吉田）



龍頭遺跡位置図
(地形図「若宮」使用)



編袋出土状況

72. はるきよしもと 春木吉元遺跡

所在地	別府市大字北石垣字市ノ原	調査面積	3890㎡
調査原因	共同住宅建設	担当者	永野 康洋
調査期間	950626～950629	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	別府市教育委員会	台帳番号	214021

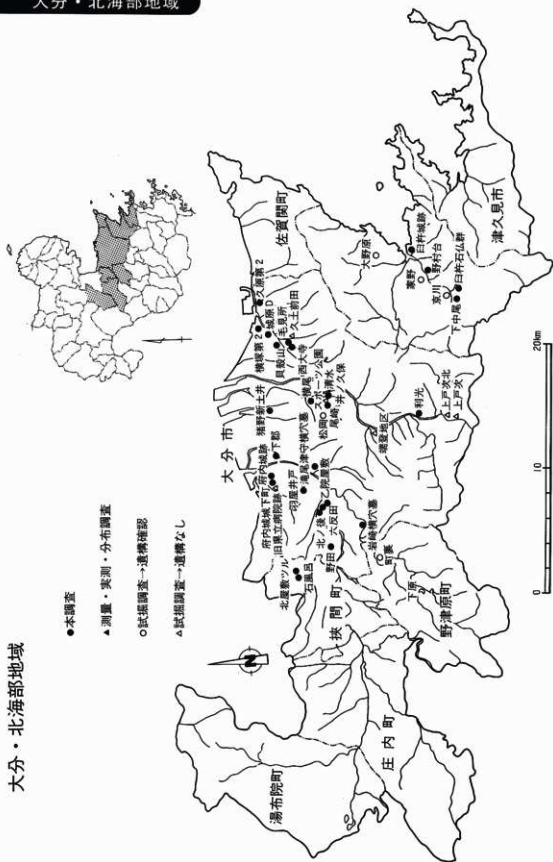
概要 春木芳元遺跡の西端に位置し、標高は約70mである。東方100mには、太郎次郎塚があり、さらに北東方向の春木川沿いには、縄文後期～古墳後期の遺跡がいくつか確認されている。試掘は5ヶ所のトレンチと、グリッドを植木と建物を避けるように設定し、実施した。その結果、攪乱層から弥生後期の甕の口縁部分など数片が出土したが、遺構は全く確認されなかったため、工事に支障はないと判断した。(永野)



春木芳元遺跡位置図
(地形図「別府西部」使用)

大分・北海道地域

- 本調査
- ▲測量・実測・分布調査
- 試掘調査→遺構確認
- △試掘調査→遺構なし



73. 井ノ久保遺跡 (B地区)

所在地	大分市大字毛井・横尾	調査面積	9600㎡
調査原因	東九州自動車道建設	担当者	小林 昭彦・小柳 和宏
調査期間	951204～951215	遺跡処置	記録保存
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	322166

概要 遺跡は清水遺跡西部の狭間川に開析された谷部に位置する。調査区を東西で二分し、西部をA地区、東部をB地区とした。このうちB地区について県教育委員会が調査を実施した。この範囲ではほぼ10m間隔で幅2mのトレンチを設定し、試掘調査を行った。調査の結果、若干の遺物はみられたが、明確な遺構はなかった。土層の観察では、地表下1～1.2mに河床を示す礫層を確認した。したがって、当地区は試掘のみで調査を終了した。

(小林)

井ノ久保遺跡 (B地区) 位置図
(地形図「鶴崎」使用)

74. 乙院屋敷遺跡

所在地	大分市大字上宗方乙院屋敷	調査面積	500㎡
調査原因	九州横断自動車道建設	担当者	染矢 和徳
調査期間	940401～950926	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	新発見

位置 乙院屋敷遺跡は大分市を南北に流れる大分川中流の河成堆積地上に位置する。調査は平成6年度から継続中であり、19世紀後半の溝状遺構を検出している。今年度の調査はこれに隣接する区域で実施した。

遺構 確認された遺構は溝状遺構2条、土坑2基、柱穴群である。

遺物 遺構の削平が著しく遺物を確認できなかった。

まとめ 遺物が出土していないため、遺構の時期については特定できなかった。(染矢)

乙院屋敷遺跡位置図
(地形図「大分」使用)

75. 猪野新土井遺跡

所在地	大分市大字猪野字新土井	調査面積	5000㎡
調査原因	宅地造成	担当者	後藤 典幸
調査期間	950413～951006	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322153

位置 大野川左岸の標高40mの南北に延びた鶴崎丘陵上にあり、明治北小学校から南に700mの場所に位置する。遺跡の東側には、大野川方向から入り込んだ谷が見られる。

遺構 調査の結果、弥生時代から古代までの複合物遺跡であることが判明した。また、一部に縄文時代の包含層を確認している。調査区南側では、大分市で初例となる奈良時代の竪穴住居跡3軒を確認し、また、平安時代の5間×2間に1間の庇の付く掘立柱建物跡や6間×3間の大型の建物跡など、合計15棟の建物跡を検出した。建物群は、東西45m、南北60mの長方形の溝で区画されており、遺構からは、白磁・越州窯系青磁をはじめ黒色土器・緑釉陶器などが出土している。全国の調査例からすると、この施設は、官衛的なものと推察され、近接する地藏原遺跡との関連が注目されよう。一方調査区北側では、弥生時代後期の溝が東西に延びるが、西側で途切れている。同台地上の多武尾遺跡の環濠の溝と形状や遺物の出土状態が類似しており、環濠集落の溝の一部と思われる。



猪野新土井遺跡位置図
(地形図「鶴崎」使用)



調査区全景

まとめ 当遺跡の立地する台地に弥生時代から平安時代にかけて大きな集落が営まれ、また、多くの建造物群を伴った施設が設けられた背景には、古代における当台地の地形上、交通上の優位性が強く作用したものと考えられる。(後藤)

76. 岩崎横穴墓

所在地	大分市大字口戸字岩崎	調査面積	100㎡
調査原因	河川改修	担当者	高橋 徹・渡部 桂司
調査期間	950701～970801	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	322106

位置 大分川支流の七瀬川は南北方向に延びる木ノ上丘陵とぶつかり大きく蛇行する。木ノ上丘陵の南端部は古井路によって切断されて独立丘陵状になっており、この丘陵の南崖面に岩崎横穴が存在する。

遺構 2基の横穴墓が調査された。1号墓は玄室のみ残存する。平面形は両袖を有する略方形で、玄室奥行き1.72m、左右2mを測る。羨道は南南東方向に開口していたと考えられる。2号墓は1号墓の斜め上の崖面にある。床面レベルで1号墓よりおよそ3m上方になる。玄室・羨道・前庭部からなる。玄室は隅丸長方形で長さ2.2m、幅2m、天井高80cm。羨道は長さ70～90cm、幅70cm、高さ80cm。羨門は二重の飾り縁を設け、玄室から前庭部へ緩やかに低くなる。

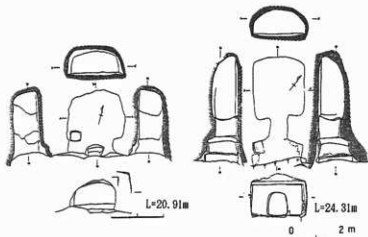


岩崎横穴位置図
(地形図「大分」使用)

遺物 横穴は調査時点で二基とも開口しており、発掘調査によっても遺物は出土しなかった。

まとめ 1号墓は高橋横穴分類のⅢ類の古段階で7世紀中葉。2号墓は1号墓より先に造られた可能性が強く、高橋横穴分類のⅡb類の最も新しい段階に位置づけられる。7世紀の第2四半期に比定される。本横穴の被葬者は古代種田郷の在地的な小長層に連なる人たちと考えられる。

(高橋)



1号横穴実測図

2号横穴実測図

77. 尾崎遺跡 (松岡遺跡)

所在地	大分市大字松岡字尾崎	調査面積	28600㎡
調査原因	道路建設	担当者	小柳 和宏
調査期間	950601～960325	遺跡処置	記録保存
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	322165

位置 大分市を流れる大野川の左岸台地（河岸段丘）上に立地する。さらに細かく見ると、大野川の一支流乙津川の左岸（西側）に発達する段丘のうち最も高い部分に位置し、さらにその東側には比高数十mの丘陵が続く。遺跡の存在する場所は現状では平坦面が約200mほど広がるが、戦後すぐの開墾によって微地形が壊され、平坦にされたものである。

遺構 弥生時代中期の円形住居跡5基、円形貯蔵穴1基、小児用のものと考えられる破壊された棺1基、古代（9世紀）の土師器焼成坑1基、近世から近代にかけて使用された溝、多数のピット、さらに江戸時代の一字一石塔がある。

遺物 遺構や包含層は確認されなかったが、旧石器が表土中から出土している。その他には、遺構に伴う弥生時代中期の土器、古代の焼成坑から出土した多数の土器、ピット以外の遺構は確認されなかった中世の土器類、その他、溝から出土した近世から近代の陶磁器類、そして、一字一石から出土した膨大な量の経石などである。

まとめ 遺構の密度は少ないが、この台地上で弥生時代中期の小規模な集落が営まれ、古代には土師器の焼成が行われ、中世には何らかの生活が営まれ、近世以降は集落の外に展開する「ノラ」として利用された。そして、その外側には一字一石塔が建てられていた。尾崎遺跡はこのような景観の変遷が追える遺跡である。

(小柳)



尾崎遺跡位置図
(地形図「鶴崎」使用)

78. 貝殻山遺跡

所在地	大分市大字一木	調査面積	
調査原因	街路建設	担当者	塔鼻 光司
調査期間	950501～950810	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322231

位置 調査区は大分市東部、大野川下流右岸に広がる丹生台地の城原面といわれる河岸段丘上に位置する。城原面は海岸段丘の性格も合わせ持つため、堆積物の中に内湾性の貝化石が含まれている。地名の貝殻山もこれから言われていると思われる。

遺構 弥生前期～中世 SX-01 逆台形を呈する谷状遺構
不明 土壌・ピット群

遺物 弥生土器（前期～中期）
古墳時代土師器・須恵器
中世陶磁器

まとめ 調査区内での谷状遺構は、幅20～30m、街路の設計上中心部しか掘り下げる事が出来なかったが、最深部で4.3mを測る。最下層は灰色シルトで、自然木の堆積が見られた。また、この直上は灰褐色層で弥生時代前期～中期の土器が大量に含まれており、人為的な掘削と堆積の状態から、谷が滞水する時期が存在したと考えられる。この後谷は埋没し、整地が行われたと思われる4層上面（地表面から約1.4m）からは土壌とピット群が検出されている。時期については直下層から古墳時代の土師器・須恵器が含まれていること、3層から奈良～平安時代の土師器片・中世陶磁器片が発見されていることから、遺構の形成された時期は奈良時代～中世と考える。谷の滞水時期、および整地後遺構の性格付け等は、今後の資料整理ならびに周辺の調査を待ちたい。



貝殻山遺跡位置図
(地形図「鶴崎」使用)



調査区全景

79. 上戸次地区^{かみへつぎ}

所在地	大分市大字上戸次字影ノ木	調査面積	250㎡
調査原因	道路建設	担当者	友岡 信彦・山田 尚志
調査期間	951211～951212	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	

概要 遺跡は大分市の南部、大南地区の大野川右岸の河岸段丘上に位置し、現在は水田として利用されている。調査はトレンチ16本を設定し、重機による遺構の検出作業を行った。調査の結果、明瞭な遺構・遺物とも検出されなかった。(友岡)

文献：「利光遺跡・上戸次北遺跡・上戸次遺跡」「一般国道10号（戸次・犬飼拡幅）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」第2集 1996年



上戸次遺跡位置図
(地形図「戸次本町」使用)

80. 上戸次北地区^{かみへつぎきた}

所在地	大分市大字上戸次字上尾	調査面積	200㎡
調査原因	道路建設	担当者	友岡 信彦・山田 尚志
調査期間	950810～950811	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	

概要 遺跡は大分市の南部、大南地区の大野川右岸の河岸段丘上に位置し、現在は水田として利用されている。調査はトレンチ23本を設定し、重機による遺構の検出作業を行った。調査の結果、明瞭な遺構・遺物とも検出されなかった。(友岡)

文献：「利光遺跡・上戸次北遺跡・上戸次遺跡」「一般国道10号（戸次・犬飼拡幅）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」第2集 1996年



上戸次北遺跡位置図
(地形図「戸次本町」使用)

81. ^{きたのうしろ}北の後遺跡

所在地	大分市大字上宗方字北の後	調査面積	1000㎡
調査原因	九州横断自動車道建設	担当者	染矢 和徳
調査期間	950401～950926	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	新発見

位置 北の後遺跡は大分市を南北に流れる大分川中流の河岸段丘上に位置する。調査は平成6年度から継続中であり、6世紀後半から末の竪穴住居跡63基、土坑5基、溝状遺構10条と大量の遺物を出土している。今年度の調査はこれらに隣接する地区で実施した。

遺構 確認された遺構は竪穴住居跡4基であるが、調査区は宅地に用いられており、遺構の残存状態は悪い。

遺物 遺構の削平が著しく遺物を確認できなかった。

まとめ 遺跡の時期は弥生時代後期終末と古墳時代後期を中心とするものであり、大分川が形成する調査区外の河岸段丘上に拡大していくものと考えられる。(染矢)

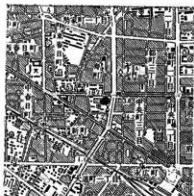


北の後遺跡位置図
(地形図『大分』使用)

82. ^{ふないじょうじょうかまち}府内城・城下町遺跡(旧県立病院跡地)

所在地	大分市高砂町2	調査面積	2000㎡
調査原因	再開発	担当者	江田 豊
調査期間	950628	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	322041

概要 県立病院が移転した跡地の再開発にともなう、試掘調査を実施した。その結果、大半は旧県立病院の建設に伴う基礎工事によって破壊されていた。またこの影響を受けていない部分については、現地表面から約1mまでが現代の層、それから下については、砂層が続き約3mで地下水の湧出が認められた。遺物も全く出土されなかったため、本調査には至らなかった。(江田)



旧県立病院跡地位置図
(地形図『大分』使用)

83. ^{くどまえだ}久土前田遺跡

所在地	大分市大字久土前田	調査面積	300㎡
調査原因	河川改修工事	担当者	玉永 光洋
調査期間	951026	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	322243

概要 大分市東部に位置し、丹生川の支流、久土川によって形成された沖積地に立地する。奈良～平安時代の遺跡として知られているが、調査地点は昭和63年度に大分市教育委員会が調査した地点から約1km上流の河川に接した右岸側である。調査は、重機を使用して確認調査を実施した。その結果、水田耕作土下において礫層が検出され、調査対象地は河川の氾濫源と判断された。従って遺構・遺物は確認されなかった。

(玉永)



久土前田遺跡位置図
(地形図「鶴崎」使用)

84. ^{くばる}久原第2遺跡

所在地	大分市大字久原字江川	調査面積	1300㎡
調査原因	土地区画整理事業	担当者	吉田 寛
調査期間	951204～960131	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	322247

位置 遺跡は標高約5mを測る古砂丘上に立地しており、現在の海岸線から約5km南側の地点に位置する。1990年に大分市が行った久原遺跡(弥生時代中期の遺跡)の北西約300mの地点である。

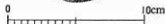
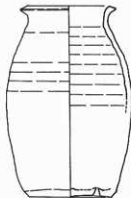
遺構 近世末期の瓦質・土師質土器を埋置した遺構7基・棧瓦を用いた区画遺構2基。

遺物 瓦質・土師質土器、瓦、瓦製品など。

まとめ 瓦質・土師質土器を埋置した遺構および棧瓦を用いた区画遺構は、いずれも墓である可能性が高いが、内部からは骨は出土しなかった。ただし、前年度に行った試掘調査の時に出土した陶磁器・瓦質土器の埋置遺構の内部からは小動物の骨が出土しており、愛玩動物(ペット)の墓であった可能性が高い。いずれも近世末期の所産である。(吉田)



久原第2遺跡位置図
(地形図『坂ノ市』使用)



久原第2遺跡出土土師質土器
(磁器・19世紀代)

85. 毛見所遺跡

所在地	大分市大字佐野	調査面積	2000㎡
調査原因	道路建設	担当者	栗田 勝弘
調査期間	951001～951227	遺跡処置	高架橋下に保存
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	新発見

位置と概要 大分市の東部、丹生川支流の佐野川の右岸上に位置している。この付近の小学は毛見所と呼ばれている。この一帯は水田であり、今でも梅雨期には水の溜まるやや低い地形を形成している。表土層下20～30cmの堆積土の中に幾つかの水田面を確認できるが、それより下層は灰褐色の粘土が厚く堆積しており、顕微鏡観察によるプラントオバールの分析でも水田面であった確証は薄いという。この粘土層の堆積は約60～180cmもあるが、層中に薄い砂層が数枚挟まっており、河川の氾濫と堆積が繰り返された様相が認められた。



毛見所遺跡位置図
(地形図『鶴崎』使用)

遺構 遺構としては、灰褐色の粘土に掘り込まれていた中世土壌墓と考えられる遺構が検出されている。その規模は、長軸120cm、短軸60cm、検出面からの深さは約10cmである。土壌の中からは何も発見されていない。一方、遺物としては、厚い粘土の堆積層中に、奈良末～平安時代の須恵器や土師器の破片がまぎらまぎら出土しており、あまり好条件とはいえない場所であるが、生活していた様子が窺える。また、弥生の下城式土器や縄文晩期の土器なども少量づつ出土している。(栗田)



遺物出土状態

86. 西大寺遺跡

所在地	大分市大字佐野	調査面積	2000㎡
調査原因	道路建設	担当者	栗田 勝弘
調査期間	950701～950930	遺跡処置	高架橋下に保存
調査主体	安心院町教育委員会	台帳番号	新発見

位置と概要 大分市の東部、丹生川支流の佐野川の左岸上に位置している。この付近の小字は土井ノ内や西大寺といわれている。ここには中世の頃、西大寺という寺が建立されていたというが、大友氏と島津氏との戦いで消失したと伝えられている。今回の発掘調査ではこれに関する遺構、遺物などは確認されていない。遺構としては、表土下約20～40cmで、時期不明の溝状遺構や古墳時代の竪穴が5～6基ほど検出されている。遺構は一辺が約4～4.6m程度の略方形の竪穴であるが、後世の削平が顕著であり、床面を僅かに残す程度である。これらには、西北壁にカマドを持ち、須恵器や土師器を伴う6世紀代の住居跡と断定できるものや、カマドを持っていない竪穴、須恵器の出土しない5世紀代の竪穴などがあり、時期の差や機能差を示唆している。また、僅かに一基であるが、集石遺跡が発見されている。遺構は浅い皿状の土壌の中に、拳大や掌大の焼けた河原礫を集めたものである。礫は大小合わせて300点もあった。時期は判断できない。

(栗田)



西大寺遺跡位置図
(地形図『鶴嶋』使用)



遺跡全景

しもごり
87. 下郡遺跡群第61次調査（H区p-19地点）

所在地 大分市大字下郡 調査面積 247㎡
 調査原因 土地区画整理事業 担当者 坪根 伸也
 調査期間 950530～950628 遺跡処置 計画通り施工
 調査主体 大分市教育委員会 台帳番号 322137

位置 今回の調査地点は、下郡遺跡群の中でも最も大分川に近い自然堤防上の高位面に位置する。標高7m前後を測り既往の周辺調査の所見では、弥生時代終末期の集落跡が広範囲に展開するエリアに隣接する。

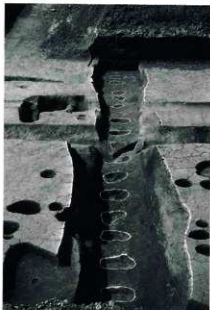
遺構 弥生時代 貯蔵穴（中期）
 古代 道路状遺構
 近世 溝状遺構

遺物 土師器・須恵器（古代）
 古銭
 近世陶磁器

まとめ 道路状遺構は検出面での幅2.1m、深さ0.8mを測る溝状を呈する。底面に径約0.5mの連続土坑を配し、内部に白色粘土を混入した混土を充填する。今回の調査では約23.7mを検出しているが、その方向は真南北に沿い、高い規格性が窺える。土層断面の観察によると、当初の掘削後、2回以上の掘り返しの痕跡が認められ、この掘り返しに伴う底面にも部分的に白色粘土の存在を確認することができる。埋土内から9世紀前半を中心とする土師器等の出土が認められ遺構の最終機能段階をほぼこの時期と考えて大過ないであろう。（坪根）



下郡遺跡H区p-19地点位置図
 （地形図『鶴崎』使用）



道路状遺構確認状況

しもごり
88. 下郡遺跡群第66・67次調査 (F区n・o-9地点)

所在地 大分市大字下郡 調査面積 1062㎡
 調査原因 土地区画整理事業 担当者 坪根 伸也
 調査期間 950719～950929 遺跡処置 計画通り施工
 調査主体 大分市教育委員会 台帳番号 322137

位置 今回の調査地点は、標高7mの自然堤防上に展開する下郡遺跡群のほぼ中央に位置する。調査は66次、67次と2次にわたるが、隣接する一連の調査である。

遺構 弥生時代 住居跡2(終末)
 古墳時代 井戸跡2(初頭)
 住居跡1
 古代・中世 掘立柱建物跡1(12C)
 土坑墓1
 溝状遺構2
 近世 土坑墓
 溝状遺構

遺物 弥生土器(終末)古墳時代土師器
 製塩土器(古墳時代初頭)
 中世土師器 輸入陶磁器 古銭
 近世陶磁器

まとめ 今回の検出遺構において特筆されるものとしては、古墳時代初頭に比定される井戸跡をあげることができる。隣接して2基を確認しているが、両者とも埋土中、井戸底に当該期の土器資料を比較的良好な状態で内包する。これまで下郡遺跡内での古代以降の井戸跡の確認事例は相当数あるが、古墳時代のものは初例であり、当該期の集落構造の把握に新たな視点を加える資料といえよう。(坪根)



下郡遺跡F区n・o-9地点位置図
(地形図『鶴崎』使用)



下郡遺跡F区n・o-9調査区

しもごり
89. 下郡遺跡群第68次調査（B区e-15地点）

所在地	大分市大字下郡	調査面積	251㎡
調査原因	土地区画整理事業	担当者	坪根 伸也
調査期間	951005～951018	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322137

位置 本調査地点は、下郡遺跡群B区e-15地点に相当する。昭和62年に弥生時代の家畜動物遺体が発見された下郡桑苗遺跡の東約100mに位置する。

遺構 弥生時代 貯蔵穴（中期）
古代 井戸跡
不明 溝状遺構
堀列

遺物 土師器（奈良時代）
刻書土師器『家益』
瓶破片



下郡遺跡B区e-15地点位置図
（地形図『鶴崎』使用）

まとめ 今回の調査において8世紀後半～末に比定される井戸跡を検出した。底付近に板材片が遺存し、本来方形の井戸側があったことを推測させる。また、井戸埋土最下層上部において完存する土師器環3個体が検出されており、出土状況から井戸廃棄時の祭祀行為に伴うものと判断される。これらの中には器外面に『家益』という文字を焼成前に刻んでいるものもあり、当遺跡では3例目の刻書資料となる。以上の調査所見はこれまで遺跡の西側部分を中心に確認されていた該期の生活遺構が東側にも広く展開している事実を示したものであり、今後の周辺地域における調査動向が注視されよう。（坪根）



井戸跡遺物出土状況

90. ^{しもごり}下郡遺跡群第69次調査（E区p-16地点）

所在地	大分市大字下郡	調査面積	405㎡
調査原因	土地区画整理事業	担当者	坪根 伸也
調査期間	951023～951204	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322137

位置 本調査地点は下郡遺跡群の中でも最も高所に位置する。現在、この帯状に分布する高位面をJR豊肥線が縦走するが、今回の調査地点はこの豊肥線に隣接する。

遺構 弥生時代 貯蔵穴（中期）
 竪穴住居跡（弥生時代終末）
 古代 道路状遺構
 土坑

遺物 弥生土器（終末）
 土師器・須恵器（8世紀～9世紀前半）
 都城系暗文土器
 土師器甕（9世紀）
 馬骨片

まとめ 今回検出した道路状遺構は下郡61次調査で確認されたものに極めて酷似しており同一のものと考えられる。両者は約200mの距離を有するが、この間も真南北を指向した直線的な展開状況が看取され、規格性の高さを想定させる。出土遺物に関しても61次調査での様相と内容的に一致し、同一遺構である可能性を強く示唆している。注目される遺物では、都城系暗文土器の出土をあげることができよう。精良な粘土が使用され、都城域からの持ち込みの可能性も考えられる。また、道路状遺構埋没途上で埋められた完形の土師器甕が確認されており、道路に伴う祭祀行為に付随するものと考えられよう。（坪根）



下郡遺跡E区p-16地点位置図
 (地形図『鶴崎』使用)



道路状遺構完甕状況

91. 下郡遺跡群第71次調査 (E区j・k-13地点)
しもごうり

所在地	大分市大字下郡	調査面積	1050㎡
調査原因	土地区画整理事業	担当者	後藤 典幸
調査期間	951114～960206	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322137

位置 今回の調査地点は、大分川の河口近くの右岸に展開する下郡遺跡群のほぼ中央に位置し、平成元年度に調査を実施し「陶質土器」を出土したE区j-12地点の南側隣接地に相当する。

遺構 調査の結果、弥生時代から近世の多数の遺構遺物を確認した。近世以降の溝状遺構が数条みられ、溝状遺構は何度かの掘り返しがあり、溝により方形に区画された空間があることを確認した。また、方形区画に沿うように版築された面が数枚みられ、道路状遺構の可能性も考えられる。井戸跡も多く12基+αを検出した。ほとんどが近世・近代の遺構だが、平安時代の井形に組んだ木枠が残る井戸跡が1基確認された。また江戸末期から明治初頭の井戸跡からは、「第三大区四ノ小區百七拾二番屋敷」と書かれた木札が出土した。また、弥生時代中期の貯蔵穴も多く確認された。貯蔵穴は上部を削平され基底部しか遺存しておらず、底面中央に円形の窪みを有するものが多数を占めた。それらは円形状に分布し、数基には底面直上に土器を内包するものがみられた。調査区東側では、16世紀前半の中世基1基を確認している。



下郡遺跡E区j・k-13地点位置図
(地形図「鶴崎」使用)



遺物出土状況 (近世)

まとめ 下郡地区の近世集落の区割の状況などを少なからず垣間みることができ、近世の集落構造の把握に有効な資料となるであろう。(後藤)

92. ^{しもごうり}下郡遺跡群第73次調査（H区q-16地点）

所在地 大分市大字下郡 調査面積 223㎡
 調査原因 土地区画整理事業 担当者 坪根 伸也
 調査期間 960108～960117 遺跡処置 計画通り施工
 調査主体 大分市教育委員会 台帳番号 322137

位置 本調査地点はJR豊肥線に隣接し、路線を挟みE区p-16次調査地点と対峙する位置にあたる。

遺構 弥生時代 溝状遺構（中期）
 古墳時代 竪穴住居跡 2
 古代 土坑

遺物 弥生土器（中期中頃～後半）
 土師器・須恵器（古墳時代）
 土師器・須恵器（8世紀前半～中頃）

まとめ 今回の調査において、竪穴住居跡、溝状遺構を検出した。住居跡は遺存状況が悪く全容は不明であるが、壁際に造り付けのカマドを付設するものである。弥生時代中期の溝状遺構はこの住居跡と重複する。検出面での幅3.5m、深さ1.1mを測る大規模なものである。溝の断面形状は逆台形を呈し、埋土中にラミナ状の水性堆積物が認められ、埋没途上に流水があった事実が知られる。出土遺物は弥生時代中期中頃～後半の所産となる土器が主体を占めるが、出土の中心は中位層にあり、溝が埋没する過程において廃棄行為がおこなわれた結果と考えられる。今後、周辺地域における当該期の遺構の探索と分布状況の把握が急務といえよう。（坪根）



下郡遺跡H区q-16地点位置図
 (地形図『鶴崎』使用)



調査区全景

93. 下郡遺跡群第75次調査 (H区r-21地点)
しもごり

所在地	大分市大字下郡	調査面積	300㎡
調査原因	土地区画整理事業	担当者	新藤美由紀
調査期間	960214～960404	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322137

位置 本遺跡は、下郡遺跡群内でも南西地域に相当する。94年度に行われた近接地域の調査では、弥生時代後期終末を中心とする竪穴住居跡・土坑・壺棺・中・近世の獨立柱建物跡・溝状遺構等を検出している。

遺構・遺物 弥生時代後期後半～古墳時代初頭の住居跡

弥生時代中期中頃の溝状遺構

奈良時代前半の溝状遺構

住居跡は、4m×4mの規模の竪穴住居である。住居内は一面、炭化材・焼土で覆われており、火災にあったことを確認できる。

弥生時代中期中頃の溝状遺構は、縄文後期包含層を掘り込んで形成されたものである。水田造成のため、溝の上部は削平されている。溝内部から弥生土器片が多量に出土しており、その中には高坏、朱塗りの壺等の完存品も数点認められる。また、同時期の磨製石鏃も一点出土している。

まとめ 調査の結果、下郡遺跡群内において確認例の少なかった弥生中期中頃の溝状遺構を確認した。この遺構は両端ともに、調査区外に展開しており、今回の調査では全容を把握することはできなかった。遺構の性格究明、範囲確認のため、延長部分の今後の調査が期待される。(新藤)



下郡遺跡H区r-21地点位置図
(地形図『鶴崎』使用)



遺物出土状況

文献：新藤・坪根編「下郡遺跡群概報(1)」大分市教育委員会、1990年

94. ^{しもごうり}下郡遺跡群第76次調査 (E区k-13地点)

所在地	大分市大字下郡	調査面積	660㎡
調査原因	土地区画整理事業	担当者	後藤 典幸
調査期間	960214～960501	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322137

位置 今回の調査地区は大分川河口の付近の右岸に展開する下郡遺跡群のほぼ中央に位置し、E区j・k-13地点の南側隣接地にあたる。

遺構・遺物 今回の調査では、弥生時代中期の貯蔵穴多数、弥生時代終末期の壺棺墓1基、井戸跡5基+α、近代まで踏襲された溝状遺構1条を確認した。貯蔵穴は円形を呈し、上部を削平され基底部しか遺存しておらず、底部中央に円形の窪みを有する。貯蔵穴は円状に分布し、数基には底部直上に土器を内包するものもある。整理の途中であるが15m以上離れた貯蔵穴内の遺物が接合するという状況が認められ、遺構の同時性の検証に好材料を提供するものと期待される。壺棺は、調査区東側土壌から検出され、底部付近には外側からの焼成後穿孔が認められる。井戸跡は井型を組んだ木枠の残る奈良、平安時代のを各1基検出した。また、他に平安、室町、江戸時代末期の素掘りの井戸各1基確認している。溝状遺構の最終埋没は出土遺物から近現代と考えられるが、隣接する第71次調査での所見から掘削時期は、近世までさかのぼる。

これらの近世遺物の中には、字の判読は不明ながら、広東碗の底部内面に焼継文字が見られるものが1点と、「波ぎ原新町国印」という焼継文字の書かれた染付破片が出土しており、当時(19世紀)の下郡の近隣との物流状況を示す資料として重要である。(後藤)



下郡遺跡E区k-13地点位置図
(地形図『鶴嶋』使用)



井戸跡完備状況

95. 城原D遺跡

所在地	大分市大字里字台	調査面積	298㎡
調査原因	無線基地局建設	担当者	塩地 潤一
調査期間	960123～960326	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322229

位置 今回の調査地区は大野川の右岸にひろがる標高約42mの城原段丘面に位置する。

遺構 弥生時代：前期末～中期前半埋没の溝
 中期前半の貯蔵穴1
 奈良時代：8世紀初頭の木棺墓1
 中世：木蓋土坑墓1・溝状遺構2

遺物 弥生時代前期末～中期前半の土器
 須恵器坏1・砥石1・燭台ほか中世土器

まとめ 今回の調査で特筆される遺構としては、弥生時代の南北溝が挙げられる。この溝は北側3分の1と残り3分の2の範囲において、溝の深さ並びに断面形状が異なるという特徴をもつ。北側3分の1の範囲ではその規模は幅約2m、深さは一律で約1.4mを測り、断面形状はV字形を呈す。土層観察の結果から一時期滞水していることが判明した。また、残りの3分の2の範囲では、幅約2.5m、深さは一律で約1.7mを測り、断面形状は逆台形を呈す。これらの溝は埋土の堆積状況からも同一の溝と判断される。また、断面形状が変わる地点でお互いの溝が曲がっているということが指摘でき、この地点からミニチュアの壺が2点出土したことも注目される。この外にも奈良時代の木棺墓、鎌倉時代～南北朝時代にかけての遺構も発見されており、今後の周辺地域の調査に期待したい。（塩地）



城原D遺跡位置図
 (地形図『鶴峰』使用)



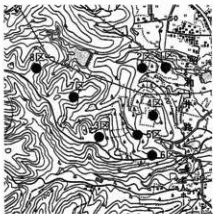
遺跡全景（北より）

96. スポーツ公園試掘調査

所在地	大分市大字松岡地	調査面積	63000㎡
調査原因	大分県スポーツ公園建設	担当者	王永 光洋・江田 豊・染矢 和徳
調査期間	950822～951006	遺跡処置	次年度本調査
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	新発見

概要 スポーツ公園建設予定地は大野川西岸より立ち上がる舌状台地とそれに続く尾根筋上に展開している。周囲には岡原遺跡、松岡遺跡、清水遺跡等があり、それらに続く遺跡が想定されたため試掘調査を実施した。試掘調査区は広範囲に渡るため、1～8区を設定して調査を行った。

- 1 区 区内に試掘溝を東西方向に3ヵ所設定した。焼石、剥片尖頭器、石核、剥片等が確認された。さらに、縄文時代早期の土器片を出土している。
- 2 区 区内に試掘溝を南北方向に2ヵ所設定した。調査の結果、縄文時代早期の土器片を出土した。
- 3 区 区内に試掘溝を南北方向に2ヵ所設定した。調査の結果、縄文時代早期の土器片を出土した。
- 4 区 区内に試掘溝を東西方向に20ヵ所設定した。調査の結果、旧石器時代の石核、弥生、古墳、平安時代の土器片と土坑を確認した。
- 5 区 区内に試掘溝を東西方向に4ヵ所設定した。調査の結果、竪穴住居跡が確認された他、全域から弥生、古墳、平安時代の遺物を出土している。
- 6 区 区内に試掘溝を東西方向に3ヵ所設定した。調査の結果、弥生、古墳時代の遺物を確認した。
- 7 区 区内に試掘溝を南北方向に2ヵ所、東西方向に2ヵ所設定した。調査の結果、土器片を僅かに出土したが、遺構は確認されなかった。
- 8 区 区内に試掘溝を南北方向に3ヵ所設定した。調査の結果、遺構、遺物ともに確認されなかった。(染矢)



大恩寺遺跡位置図
(地形図『鶴嶋』使用)

そうす
97. 清水遺跡

所在地	大分市大字毛井・横尾	調査面積	20800㎡
調査原因	東九州自動車道建設	担当者	小林 昭彦・小柳 和宏
調査期間	950601～960325	遺跡処置	記録保存
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	322166

位置 遺跡は大分市東部、乙津川の西岸に位置する。この一帯は狭間川に開折された谷の開口部から乙津川に向かって扇状地が広がる。周辺の遺跡としては、北1kmの横尾貝塚が同様の地形上に立地している。調査は段丘礫面、埋没河道など複雑な旧地形が展開する範囲を対象として実施した。調査区の大半は湿潤な水田地帯であり、遺構の密度は低いものと想定していたが、予想以上の遺構を検出した。

遺構 弥生時代：中期～後期の竪穴を各1基
小児甕棺1基
古墳時代：後期の竪穴5基
奈良時代：掘立柱建物2棟、うち1棟は倉水田跡
その他：各時代の遺物の散布がみられた。

遺物 弥生時代：中期～後期の土器
古墳時代：6世紀後半の須恵器、土師器
奈良時代：8世紀後半の須恵器、土師器
平安時代：9世紀代の土師器
中・近世：瓦質・土師質土器、陶胎染付

まとめ 調査の結果、調査区南東部で検出した竪穴・建物はさらに南に広がり微高地上に集落が形成されている可能性がある。また水田については関連分野の研究者の協力を得て平面・断面の両面から確認したものであり、水田の調査方法に大きな示唆を得た。（小林）



清水遺跡位置図
(地形図『鶴崎』使用)



清水遺跡全景

98. 滝尾津守横穴墓群

所在地 大分市大字津守宇正蓮寺
 調査原因 宅地造成
 調査期間 950824～950829・960213～960223
 調査主体 大分市教育委員会

調査面積 横穴墓6基
 担当者 讃岐 和夫・塔鼻 光司・坪根 伸也
 遺跡処置 計画通り施工
 台帳番号 322080

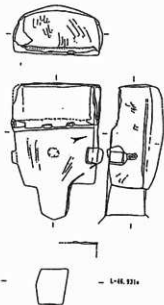
位置 滝尾津守横穴墓群は、大分川の右岸に臨む守岡台地（守岡遺跡・曲石仏等が所在する）の中腹から北側へ突き出した崖面に上下2段に造営されており、横穴墓はすべて東に開口している。現状で14基を確認でき、内部はすでに荒らされ部分的に改変を受けている。

遺構 今回の調査は6基を対象とした。これらは標高42.5mから47mの間に造営されている。最も北側に1号横穴墓が所在する。横穴墓は前庭部や羨門・羨道に一部をすでに欠損している。平面形は1・2・4・6号が長方形、3・5号が方形を呈しており、天井部は1・3・4・5号はアーチ形、6号は家形を呈している。特に2号横穴墓は一番高い所に位置し後世の削平で一部崩落しているが、玄室の平面形は長方形をなし、天井部は明瞭な稜線をもたずアーチ形への過渡的な様相が認められる。また、特筆すべき点として屍床の両脇に突起が造られており、この形態は飛山1号横穴墓との構造的な類似といえよう。

まとめ 1号～6号横穴墓からは遺物の出土が皆無のため厳密な時期の比定は非常に困難であるが、横穴墓の形態から6世紀後半以降に造られたものと考えられる。（讃岐）



滝尾津守横穴墓群位置図
 (地形図『鳥嶋』使用)



B号横穴墓平面・断面実測図
 (1/100)

99. 利光遺跡

所在地	大分市大字上戸次字久保	調査面積	1200㎡
調査原因	道路建設	担当者	高橋 徹・友岡 信彦・綿貫 俊一
調査期間	950515～951120	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	3322276

位置 遺跡は大分市の南部、大南地区の大野川右岸の河岸段丘上に位置し、周囲には鶴ヶ城跡・戸次河原合戦跡など、中世の豊薩合戦時の遺跡が多数存在する地域である。

遺構 久保地区 柱穴群・火葬墓・鍛冶工房・石組遺構・土坑・包含層
タンクワ地区 -

遺物 久保地区
柱穴内 土師皿等
火葬墓 人骨片等
鍛冶工房跡 鉄滓
石組遺構 土師皿
土坑 磁器・瓦器・土師器等
包含層 硯・緑釉陶器・土師皿等
タンクワ地区 旧石器

まとめ 久保地区は昨年度の試掘調査で中世の遺物包含層を検出したため、今年度本調査を実施した。包含層は厚さ約40cmで、包含層下からは中世の遺構を検出した。不定形土坑からはまとまった量の土器が出土しており、当該期の土器編年に寄与しうる資料である。時期は14世紀中頃に位置づけられる。久保地区の遺構・遺物は概ね14世紀代に位置づけられる。タンクワ地区では攪乱層から少量の石器が出土した。(友岡)



利光遺跡位置図
(地形図「戸次本町」使用)



不定形土坑土器

100. のだ 野田遺跡

所在地	大分市大字野田	調査面積	1000㎡
調査原因	道路建設	担当者	塔鼻 光司
調査期間	951002～960229	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322061

位置 本調査は市道国分寺～野田線建設に伴う発掘調査である。国指定史跡豊後国分寺跡の北西に広がり、標高85m前後の野田面とよばれる河岸段丘面のほぼ中心を、東西方向に横断し建設される市道内において調査を行った。今回の調査は昨年度に続き2次調査として行い、台地の東端部分を中心に調査区を設定した。

遺構 遺構としては、若干のピットと不定形の土坑が検出された。

遺物 ピット内よりチャート製の打製石鏃が1点、遺構検出面下位層（黄褐色土層）より旧石器（剥片）が12点検出された。

まとめ 今回の調査では、時期同定の確かな資料となり得るものが少なく結論を導くことは難しいが、当調査区北側に位置する野田山遺跡・下黒野遺跡の調査結果から周辺地域に、旧石器時代～縄文時代の遺構の存在が考えられる。
(塔鼻)



野田遺跡位置図
(地形図『大分』使用)



遺跡全景

はたのぼり
101. 端登地区

所在地	大分市大字端登	調査面積	8000㎡
調査原因	道路建設	担当者	染矢 和徳
調査期間	960307～960308	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	

概要 調査区は大分市南部の河原内川がつくりだす沖積地とそれにつづく尾根筋上にある。調査の結果、遺構、遺物は確認されなかった。
(染矢)



端登地区位置図
(地形図『大綱』使用)

102. 羽屋井戸遺跡

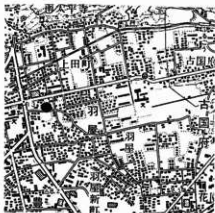
所在地	大分市大字羽屋字井戸	調査面積	2375㎡
調査原因	アパート建設	担当者	讃岐 和夫他
調査期間	960110～960229	遺跡処置	盛土による保存
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322070

位置 羽屋井戸遺跡は、大分川左岸、南大分中学校から東へ350m、豊府小学校から西へ650mの地点に位置している。沖積平野である羽屋・古国府一带は古代の豊後国府推定地として最も有力視されていた地域に相当する。

遺構	弥生時代	住居跡 1
	古墳時代前期	住居跡 3 溝状遺構
	不明（未掘のため）	住居跡 3
	古代	掘立柱建物跡 7 溝状遺構

遺物	古墳時代前期	高環、小型丸底壺、壺、甕
	古代	須恵器、土師器 都城系暗文土器

まとめ 今回検出された掘立柱建物跡の規模は、最大で建坪面積が122.5㎡を測り、大分県内で発見されている建物中で最大規模を有している。これまで国府推定地として明確な遺構・遺物の発見が皆無であったことを踏まえると、今回発見された掘立柱建物群が豊後国府探索の端緒となるものと期待されよう。（讃岐）



羽屋井戸遺跡位置図
(地形図『大分』使用)



調査区全景

103. 府内城跡^{ふないじょうあと}

所在地	大分市荷揚町	調査面積	590㎡
調査原因	府内城再発見事業	担当者	讃岐 和夫
調査期間	950509～960131	遺跡処置	保存・整備
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	県指322011

位置 市街地の中央部には官庁（県庁、市役所）街が所在し、府内城跡はこの中心に位置する。現在は城址公園として大分のシンボルの史跡として市民に親しまれている。府内城は慶長2年に福原直高によって築造され、さらに慶長7年に竹中重利が増改築し、城下町を含めて完成した。その後、日根野氏が城主として入るが、万治元年に松平忠昭（大給）の居城となり幕末を迎えた。

遺構 石垣等は旧県庁施設の建物基礎により大きく改変されていた。今回確認した遺構には山里丸（北ノ丸）曲輪西側の堀と石垣、階段状石垣、冠木門礎石、西ノ丸と本丸を結ぶ土橋の石垣と堀状況、本丸の西渡櫓石垣基礎、廊下橋基礎木杭などがある。

遺物 瓦、染付碗、皿（堀）
瓦、土師質小皿（西ノ丸）

まとめ 府内城は北方を海に面し、残りの三方が堀で囲まれた浮城構造をとっていることが今回の調査で改めて明らかになった。本丸の周囲には幅約20mの堀が廻り石垣は野面積の方法をとっている。また、冠木門の存在と西ノ丸側の廊下橋入口の切石による石敷の状況を明確にすることができた点は調査の大きな成果である。府内城跡は再発見事業の一環として廊下橋の復元およびその周辺の整備を進めている。（讃岐）



府内城跡位置図
(地形図「大分」使用)



西ノ丸廊下橋入口周辺状況

104. 府内城・城下町遺跡

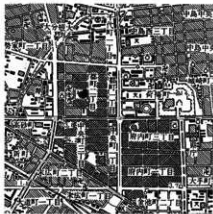
所在地	大分市都町3-3	調査面積	866㎡
調査原因	公園造成	担当者	塩地 潤一
調査期間	950517~950928	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322041

位置 今回の調査地は府内城下町の推定塗師町と寺町にあたる。

遺構 縄文時代：晩期の堆積層
 平安時代：掘立柱建物跡1・井戸・土坑
 江戸時代：塗師町と寺町の町境
 地下式倉庫跡1

遺物 「寺丁かとや」と朱書された磁器・越州窯系青磁碗Ⅰ-2-b類・白磁ⅢVI-1-b類・鉾洋

まとめ 今回の調査では、遺構の重複が多い中で、南北方向に幅約1mの範囲において遺構がほとんど存在しない部分を確認した。この空閑地の西側の遺構群からは焼き窯を施した陶磁器が大量に出土し、それらの底部には「寺丁かとや」「寺町仕立や」と判読できる朱書き文字が確認された。このため、この空閑地を寺町と塗師町の町境と判断した。このことは1987年に大分市史編纂委員会が提示した府内城下復元図とほぼ整合し、今後の府内城下内での調査において、注目される資料と考えられる。また、平安時代の遺構については11世紀後半の井戸や掘立柱建物跡ならびに廃棄土坑3基と柱穴群を検出した。これらの遺構からは越州窯系青磁碗Ⅰ-2-b類、白磁ⅢVI-1-b類や研磨土師器碗、須恵器杯・鉢、瓦器、土師器杯・皿、石鍋片、鉾洋などが出土している。今回、旧海岸線沿いと考えられる低位段丘面において11世紀代の遺跡の存在が判明したということは大きな成果と言える。(塩地)



府内城・城下町遺跡位置図
(地形図「大分」使用)



塗師町・寺町町境全景(北より)

105. ^{よこお}横尾遺跡群（B-11地点・東中尾遺跡）

所在地	大分市大字横尾字寺ノ下	調査面積	380㎡
調査原因	土地区画整理事業	担当者	池邊千太郎
調査期間	951026～951108	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322160

位置 遺跡は大野川下流左岸の河岸段丘上の標高35mにあたり、台地の端からやや奥まった所に位置する。そのすぐ山際には創建が1455年の寺があり、現在の建物は江戸時代に再建したものである。

遺構 いずれも近世の遺構が検出された。東西に延びた2間(5.8m)×2間(4.4m)の掘立柱建物跡(SB01)が1棟と1間×1間の掘立柱建物跡(SB02)が1棟確認された。また、掘立柱建物跡(SB01)の北側の桁行の内側には、一辺1mの方形の土坑が2基並行して検出された。

遺物 土坑や柱穴から磁器の破片が出土したが、小片のため正確な年代を決める遺物とはなり得なかった。

まとめ 今回の調査面積は、380㎡と非常に狭く調査区の中心に掘立柱建物跡とその周囲に溝が見られるにすぎないが、この時期の遺構はさらに周辺に広がっており、遺跡の性格を知る上で今後の調査に期待される。このため、今回の調査からは、掘立柱建物(SB01)を規模や形態から倉庫として使用されたと考えることにとどめたい。(池邊)



横尾遺跡位置図
(地形図『鶴崎』使用)



SB01全景

106. ^{よこお}横尾遺跡群 (D-39・E地点・有田遺跡)

所在地 大分市大字横尾字江又

調査原因 土地区画整理事業

調査期間 950411～950526・951127～951216

調査主体 大分市教育委員会

調査面積 340㎡

担当者 池邊千太郎

遺跡処置 計画通り施工

台帳番号 322161

位置 大分市の中央に位置し、大野川河口から約6.5km南に位置し、遺跡は乙津川すぐ左岸の標高22～23mの東斜面にある。遺跡の直下には縄文時代の横尾貝塚が位置している。

遺構 竪穴遺構(SX01)は一辺4mの隅丸方形で周壁には等間隔に柱穴が巡っている。さらに床面は、貼り床が確認され、フラットになっている。埋土からは、大量の土師器(9C前半代)が出土している。

1号土坑(SK01)は、竪穴遺構(SX01)よりも一段低い位置にあり、長軸1.9m、短軸1.5mの隅丸長方形で完形品やそれに近い土師器が出土し、祭祀的な性格を有する。

これに隣接して、掘立柱建物が6棟検出され、柱穴内には、柱を抜いた跡に埋納された土師器環(9世紀前半代)が数カ所出土している。

遺物 竪穴遺構(SX01)…土師器の環・蓋・甌・移動式カマド・甕・埴、少量の須恵器の埴・甕、土錘

1号土坑(SK01)…土師器の環・蓋・甌
柱穴…土師器の環・甌・移動式カマド

まとめ 遺跡は大野川乙津川を望む緩やかな東斜面に位置し、大形の掘立柱建物が同じ場所に幾度も立て替えが行われている。さらにその背後には竪穴遺構がある。こうした遺構が斜面にあることや大量に出土する遺物から、一般庶民の住居とは考えられず、なんらんかの施設を想起させる。(池邊)



横尾遺跡位置図
(地形図『鶴崎』使用)



竪穴遺構(SX01)遺物出土状況

107. ^{よこお}横尾遺跡群 (D-39・41地点・有田遺跡)

所在地	大分市大字横尾字江又	調査面積	700㎡
調査原因	土地区画整理事業	担当者	池邊千太郎
調査期間	950411～950526・951129～951222	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分市教育委員会	台帳番号	322161

位置 横尾区画整理事業区域の最南端の台地上にあり、東側眼下には縄文時代の遺跡で有名な横尾貝塚がある。遺跡は標高27m前後に位置している。

遺構 調査区は東西に長く、南側と東側は斜面となっている。このうち東側斜面には、長軸1m、短軸0.7m、深さ20cmの楕円形の土坑(SK01)が単独で1基あり、遺構の残りは悪いが、埋土に灰が充満しており、これに混じって土師器の坏が3点出土した。遺構の床面には拳大の石が敷き詰めた様な状態で確認された。

このほかに、調査区内には、風倒木痕と柱穴を確認したが、建物となるような遺構は見られなかった。

遺物 1号土坑(SK01)からは、糸きり底の土師器の坏が3点出土している。

まとめ 灰が充満した土坑は、東斜面の高台に位置し、ここでなんらかの祭祀がおこなわれたのではないかと考えられる。(池邊)



横尾遺跡位置図
(地形図『鶴嶋』使用)



1号土坑(SK01)

ろくたんだ
108 六反田遺跡

所在地	大分市大字上宗方字六反田	調査面積	2000㎡
調査原因	九州横断自動車道建設	担当者	江田 豊
調査期間	950405～950730	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	322111

位置 大分川と七瀬川の流れが合致するところで形成された沖積地の北寄りの所で南西には雄城台遺跡、北に北の後遺跡がある。現況は水田および宅地である。

遺構 検出された遺構は古墳時代の住居跡が3基、溝が4条、時期不明の土坑が12基、溝が5条、ピットが若干数である。住居跡については竈が付設されている。また溝に係わるピット群は水門状の遺構が想定される配置を示している。



六反田遺跡位置図
(地形図『大分』使用)

遺物 竪穴住居跡および溝から6世紀後半～7世紀初頭にかけての須恵器の坏、埴瓶、高杯、平瓶がほぼ完形品で出土した。土師器は、甕の完形品が2～3点出土したが、大半は小破片で溝に流れこんだ状態で出土した。

まとめ 古墳時代の集落の一部とそれに伴う水利施設が確認されたが、6世紀の後半代から7世紀にかけて、大分川の蛇行の関係が微妙に水の取り入れの位置が移動している。さらに溝に付属するピットについては水門状の配置が想定されるものが数カ所ある。集落部については今回の調査では3基しか住居跡は確認されなかったが、この中心部分は調査区から東側に展開するものと思われる。ここより北約100mにある北の後遺跡には時期的に重複する遺構が確認されているため、沖積地上にあった微高地には点々とこのような集落があったものと思われる。(江田)



六反田遺跡遺構配置図

109. ^{よこつか}横塚第2遺跡

所在地	大分市大字里字王ノ瀬	調査面積	280㎡
調査原因	土地区画整理事業	担当者	吉田 寛
調査期間	951115～951130	遺跡処置	計画通り施工
調査主体	大分県教育委員会	台帳番号	32213

位置 遺跡は標高約5mを測る古砂丘上に立地しており、現在の海岸線から約3km南側の地点に位置する。『大分県遺跡地図』では弥生時代の集落遺跡として周知されていたが、今回の調査地点では縄文時代後期の遺物が出土した。

遺構 縄文時代後期の遺物包含層（二次堆積）

遺物 縄文土器・土偶

まとめ 包含層から縄文土器とともに近世・近代以降の遺物が混在して出土しており、二次堆積と判断された。注目すべき遺物としては板状土偶があり、縄文時代後期前半に比定される。（吉田）



横塚第2遺跡位置図
（地形図『大分』使用）

110. ^{ましろら}町裏遺跡

所在地	大分郡野津原町大字野津原字町裏	調査面積	1000㎡
調査原因	庁舎建設	担当者	吉田 寛
調査期間	960322	遺跡処置	次年度本調査
調査主体	野津原町教育委員会	台帳番号	新発見

概要 遺跡は標高約30mを測る段丘上に位置する。試掘調査は重機を利用して任意のトレンチを掘り下げる方法で行った。その結果、弥生時代前期末の土器が出土し、周囲に遺物包含層の存在が確認された。さらに地籍図などの検討から、近世の宿場関係の遺構の存在も想定される。そのため、次年度に本調査を行う予定である。（吉田）



町裏遺跡位置図
（地形図『野津原』使用）